
平成28年度共通教育 活動報告書

I 「共通教育実施委員会」活動の総括	1 ^P
II カリキュラム等編成部会	5
III 自己点検・自己評価部会	6
IV FD部会	18
V 広報部会	22
VI 分科会報告	
1 大学基礎論分科会	24
2 課題探求実践セミナー分科会	29
3 学問基礎論分科会	32
4 人文分野分科会	39
5 社会分野分科会	44
6 生命・医療分科会	49
7 自然分野分科会	54
8 外国語分科会	60
9 キャリア形成支援科目分科会	—
10 スポーツ・健康分科会	62
11 日本語・日本事情分科会	69

平成 28 年度「共通教育実施委員会」活動の総括

2017 年 3 月 30 日
共通教育実施委員会

1. 共通教育実施委員会および常任会議

本年度は、以下の 3 項目を重点事項として掲げた。

- ① 平成 29 年度の共通教育授業の担当体制は、平成 28 年度の担当体制を継続する。
- ② 大学教育創造センターを中心に進められる見直しの方針に沿って、初年次科目（大学基礎論・課題探求実践セミナー・学問基礎論）の実施体制を整備する。
- ③ 4 学期制導入に関する共通教育検討 WG 等によって進められる検討結果に沿って、共通教育開講授業の実施体制の再検討を始める。

上記の重点事項に関する成果は以下の通りである。

①の平成 29 年度共通教育担当体制は、方針どおり、平成 28 年度の担当体制を継続する形で決定した。これは、教員人事のポイント制が停止されていること、平成 27 年度の見直し作業により平成 28 年度から新たな担当体制が実施されており、平成 28 年度の後半の履修状況がまだ把握できない段階から平成 29 年度担当体制を検討するため、継続するとしたものである。

まずは本年度授業開講状況を振り返る。

本年度入学生（地域協働学部除く）から共通専門科目が廃止され、共通教育の教育課程は、初年次科目と教養科目で構成されることとなった。

昨年度の担当体制見直しによりほとんどの学部で担当コマ数が減少したが、学生の履修状況が大きく混乱することはなかった。この理由は、

- ・ 廃止された共通教育基礎科目から一部科目が教養科目に移行した、
- ・ 機構・センターの教員への授業担当協力依頼により 15 科目新規開講があった、
- ・ 知プラ e 科目が 7 科目新規開講された、

などにより本年度の教養科目開講授業数は昨年度より 44 科目増加したためと考えられる。

平成 29 年度担当体制の検討に際しては、採用人事が凍結されているものの、各学部においては退職者や改組に伴う教員異動があり、昨年度の担当体制の継承が甚だ困難なものに限っては学部からの変更申し出を受けた。この結果、人文社会科学部の希望により、「日本事情」の担当コマ数を 1 減とした。これらの結果、平成 29 年度カリキュラムはほぼ順調に編成することができた。

ただし、今年度のカリキュラム編成に関わる課題として下記の 2 点について、次年度以後、継続的に検討していく必要がある。

- ・ 現在の担当体制に教員の異動に伴う実際の教員数を反映させるか

平成 29 年度担当体制については、学部からの個別希望に対応する形としたが、平成 30 年度は当初から担当体制に反映させるかどうかの検討が必要である。

- ・ 教育職員免許状取得希望者の体育実技 1 単位必修化

理工学部の課程認定にあたって文科省から教員免許取得に係る「スポーツ科学実技」1 単位必修化について指導があった。平成 29 年度は、特には科目を増加せずに対応することとしたが、教育職員免許法の改正に伴い、平成 31 年度入学生からは全学部等の教員免許取得希望者の体育実技 1 単位必修となる見込みであり、向こう 5 年にかけて共通教育の体育実技を担当可能な専任教員が定年退職を迎えること、非常勤講師の雇用も難しい現状を考慮すると、授業科目の編成等検討が必要である。

②の初年次科目の見直しに際しては、まず、平成 27 年度の「大学基礎論」の授業アンケ

ートの分析を全学部について行った。予察的な分析結果ではあるが、この授業開始当初（平成 20 年度）作成された実施要領からは逸脱するものの、教育学部および医学部が実施した大学基礎論は学生からの評価が高かったのに対して、それ以外では、当初の実施要領に沿って実施してはいるものの、学生からの評価はより低い学部が多いことが分かった。この結果は、学生をめぐる状況は学部ごとに大きく異なり、**共通教育の初年次科目であっても、学部ごとの状況に応じたカリキュラムを編成することの必要性を示唆するものであった。**

この分析結果を踏まえ、4 学期制導入に関する共通教育検討 WG の中で、各学部選出メンバーとともに、「大学基礎論」と「学問基礎論」の実施要領の見直しを進めた結果、**当初の実施要領をより自由度の高いものに変更し、教育目標は全学で共有しつつも、各学部の裁量と責任において授業内容と実施方法を決定するとともに、不断の見直しをしていくこと**となった。特に、大学基礎論では、**キャリア形成、あるいは学習の振り返り**を中心に実施し、学問基礎論では、**アカデミック・ライティングの導入**を推奨した。「課題探求実践セミナー」については検討に至らなかったため、次年度の課題として残った。

③ の共通教育における 4 学期制導入への対応については、「4 学期制導入に係るタスクフォース会議」の下に設置された「共通教育検討 WG」において検討することとなった。実際には、「カリキュラム・時間割編成検討 WG」から依頼のあったターム科目への移行調査への各学部からの回答を集約する作業を通じて検討を行った。その結果、農林海洋科学部および医学部ではおもにキャンパス間の移動に関わる問題のため、教育学部ではカリキュラムの日程的制約のため、移行が困難であるとの回答であった。他学部でも**ターム科目への移行に対しては否定的な回答が多く、肯定的な回答は限定的であった。**今後は、先行して 4 学期制を導入した他大学の情報を得ながら、さらに検討していく必要がある。

なお、このような状況の結果、4 学期制への移行を踏まえて行う予定であった共通教育担当体制の再検討も、着手するには至らなかった。

上記の重点事項のほか、現行の**共通教育カリキュラム編成方針を明文化**する作業を進めた。これは、今後、共通教育カリキュラムを再検討していく際の基礎として、まず着手したものである。なお、卒業認定・学位授与に関わらない共通教育ではディプロマ・ポリシーは非該当であり、ディプロマ・ポリシーに対応したカリキュラム・ポリシーも非該当である。しかし、学士課程のほぼ前半を担う共通教育は独自にそのカリキュラムの理念を示すことが求められることから、この方針は当面それに代わるものとして位置づけられる。

なお、平成 28 年 3 月 31 日付の中教審によるポリシーに関するガイドライン（p. 6）は、カリキュラム・ポリシーの策定に当たっては、初年次教育、教養教育についても検討することを求めている。しかし、本年度行われたポリシー見直し WG による作業結果では、**学部学科ごとに共通教育のカリキュラムに関する検討内容にばらつきが大きく、この点は今後の課題として残されることとなった。**

2. 部会活動

本委員会では、これまで「カリキュラム等編成部会」、「自己点検・自己評価部会」、「FD 部会」、「広報部会」の 4 部会において、それぞれの領域における委員会全体の取りまとめや分科会活動への支援を行ってきており、今年度もこの方式を継続した。以下、各部会の取り組みの要点のみ、略記する（詳細は各部会の報告を参照）。

カリキュラム等編成部会では、「平成 28 年度共通教育担当体制に係る基本方針について」に沿って次年度のカリキュラム編成作業を行い、おおむね方針通り編成することができた（詳細は、前記の重点事項①参照）。

自己点検・自己評価部会では、授業改善アクションプランの実施を中心に 5 週目および 15 週目アンケートを行い、その結果を分析するとともに授業改善活動を行った。

FD 部会では、共通教育 FD 部会が実施する FD 活動について、アンケートによるニーズ調

査、開催時期調査を1学期末に行った。その結果を基に、2件のFD研修「高知大学のICT機器を使う」および「大規模クラスでもできるアクティブラーニングの手法」を実施するとともに、アンケートの集計・分析も行った。なお、学生委員会の活動再開については、実現に至らず、今後の課題として残った。

広報部会では、『パイプライン』第48号を12月に発行、第49号を3月に発行（予定）した。このほか、メール会議を通じて、電子化した広報誌『パイプライン』の読まれ方について、Googleアナリティクスによってアクセス数を確認し、分析検討した。次年度に向けての課題としては、編集方針・編集内容の再考、新入生オリエンテーションでのアナウンスなどが指摘されている。

3. 分科会活動

本委員会における分科会活動は、これまで「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んできた。以下、各分科会で取り組まれた活動について、それぞれの項目ごとの概要は以下の通りである（詳細については各分科会の報告を参照）。

(1) カリキュラム編成の取り組み

カリキュラム編成の詳細については、分科会ごとの個別の報告に譲る（概要は前記の重点項目①の通り）。

以下、カリキュラムの編成作業ではないが、今年度実施した授業の内容改善に関する取り組みとして、初年次科目の「大学基礎論」と「学問基礎論」について付記する。

大学基礎論のカリキュラムの内容については、多くの学部でこれまでの内容をほぼ踏襲した形で授業が行われた。改組初年度に当たる農林海洋科学部では、従来のグループワーク型の大学基礎論の成果を活かしつつ、講義の回数を増やすことを通じてこの授業を独自に改善したことは注目される。

学問基礎論も多くの学部でこれまでの内容をほぼ踏襲した内容で授業が行われたが、医学部では、医学科が2022年に受審を予定している分野別国際認証に向けて、医学教育のグローバルスタンダードの中で重要視されている『行動科学』に焦点を当てた内容となった。また、改組後初年度の農林海洋科学部では、これまでの1学科8コースでの実施体制から、3学科（海洋資源科学科は3コースに分かれて）で、それぞれ独自の手法での実施となった。

(2) 自己点検評価の取り組み

おもな取り組みは、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、各学部で、授業参観、授業アンケート・自己分析アンケートの実施、担当者間での自己点検評価活動などを通じて、自己点検が行われた。

課題探求実践セミナー分科会では、昨年度と同様の形式で、受講生によるセルフ・アセスメントと授業評価アンケートが実施された。

学問基礎論分科会では、授業評価アンケート、受講生からの直接の聞きとりなどの方法で自己点検評価が行われた。

人文分野分科会では、授業改善アクションプランと授業改善・授業評価にかかる学生アンケートに関する他大学（熊本大学）での現状聞き取り調査が行われ、その結果が詳しく報告された。

社会分野分科会では授業アンケートが実施された。

生命・医療分科会では、「健康」の授業評価アンケートを結果とその分析が詳細に報告された。

自然分野分科会では、授業アンケートの実施とその結果に基づき自己点検が行われた。

外国語分科会では、一部教員間での相互授業参観が行われた。

キャリア形成支援分科会：

スポーツ・健康分科会では、学期末授業評価アンケートが実施された。

日本語・日本事情分科会では、日本語Ⅰと日本語Ⅲの授業でピア・レビュー活動が実施された。

(3) FD 活動の取り組み

FD 部会が実施する FD 活動以外の分科会独自のおもな取り組みは、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、担当者間での FD 活動、アドバイザー教員による FD 会議、大学基礎論チューター研修会、教員（複数名）によるピア・レビュー、授業参観、グループワークに関する学生アンケート等が行われた。

課題探求実践セミナー分科会では、当初計画した SPOD フォーラム（8 月・愛媛大学開催）、外部セミナー（11 月開催）および全学 FD フォーラム（3 月開催）へ担当教員が参加した。このほか、当初計画がなかった、全学向けセミナー（大学組織を理解する）および特別プログラム（「学生主体」の授業デザインワークショップ）にも参加した。

学問基礎論分科会では、教務委員会主催のコースの FD ミーティング、担当教員間で情報共有等の形で、FD 活動が行われた。特に、医学部からは、長年にわたる授業の記録がまとめて報告されており、FD 活動に役立つ資料となっている。

人文分野分科会では、分科会 FD「オーディオ機器を用いた自立的授業改善の試み」が企画・実施された。1 学期に人文社会科学部 1 名（録音）、2 学期に教育学部 2 名（録画）が実施され、過去の経験者 2 名も加わって計 5 名で研修会が開催された。

社会分野分科会：

生命・医療分科会では、本年度講義資料の電子化が試みられ、この効果や今後の在り方について検討がなされた。

自然分野分科会では、FD 部会主催の FD に対するニーズの調査依頼に答えて分科会として集約された意見（アクションプランの作成、アクティブラーニング・スタジオの設置）が提案されている。

外国語分科会では、外部講師（近畿大学経営学部講師熊谷哲哉氏）を招いての講演と意見交換会、および教員による他大学等（金沢大学外国語教育センターおよび慶應義塾大学日吉キャンパス）での状況調査・意見収集が行われた。

キャリア形成支援分科会：

スポーツ・健康分科会では、スキーⅠ・Ⅱ およびスノーボードⅠ・Ⅱにおいて、安全面に関して受講学生や担当教員から聞き取り調査を行った。

日本語・日本事情分科会では、「日本語」「日本事情」それぞれの科目ごとに FD 活動を行った。「日本事情」では受講生の属性、日本語レベル等の確認、授業内容を振り返り、問題点・課題の共有）を受け、その上でそれぞれの担当教員が授業内容を検討・決定した。

4. その他

- (1) 『平成 28 年度共通教育実施委員会活動報告書』は 4 月中に発刊し、WEB 上で公開する予定。
- (2) 委員が交代する場合には、次年度の課題に対する検討も含め、引き継ぎをお願いしたい。

Ⅱ. カリキュラム等編成部会

カリキュラム等編成部会長 高橋 俊

1. カリキュラム等編成の経過

○7月1日 第1回カリキュラム等編成部会

「平成28年度共通教育担当体制に係る基本方針について(案)」を確認した後、本年度のカリキュラム編成スケジュールを確認した。

○9月23日 第2回カリキュラム等編成部会

「平成28年度共通教育担当体制に係る基本方針について」に沿って次年度のカリキュラム編成作業を開始することを確認した。

○12月19日 第3回カリキュラム等編成部会

「平成29年度共通教育科目授業題目(案)」が了承された。

2. 平成28年度カリキュラム編成の総括

本年度は、平成29年度以降に予定されている全学的な改組に伴う共通教育科目の取り扱いについての議論が行われたため、本部会では基本的に前年を踏襲する方向でカリキュラム編成が行われた。しかし今後、大幅なカリキュラム変更(共通専門科目の廃止、各学部の担当コマ数の変更等)が予想されるため、次年度は本部会におけるより細かな議論が必要になると思われる。

Ⅲ. 自己点検・自己評価部会報告書

自己点検・自己評価部会 松井透

はじめに

共通教育自己点検・自己評価部会では、共通教育の授業・カリキュラムの改善に結びつく自己点検・自己評価活動を行ってきており、近年では主に「授業改善アクションプラン」の実施を中心に活動している。「授業評価アクションプラン」は、共通教育担当教員が「学生の授業評価」や「相互授業参観」、「ピア・レビュー」により得られた授業改善のための課題に基づき、「アクションプラン」を作成・学生への提示・実行・検証を行うもので、平成 20 年度 2 学期から試行がはじまり、平成 24 年度 2 学期から本格実施された。本稿では「授業改善アクションプラン」のうち、「5 週目・15 週目学生アンケート」による「学生の授業評価」結果について報告する。

方法

本年度もこれまでと度同様に、回答理由選択式と回答理由記述式のアンケートを実施した。アンケート本体は平成 25 年度の活動報告書¹を参照されたい。集計されたアンケートデータは、まず 1 学期分と 2 学期分を統合し、全授業で実施された「はい」～「いいえ」で回答する選択式アンケート項目と自由記述欄のデータを抽出した。選択式アンケート項目については、各回答の割合をそれぞれ算出し、5 週目と 15 週目の比較を行った。選択理由項目（複数選択可）については、選択式アンケートのデータのみを用い、その実数をグラフ化して 5 週目と 15 週目の比較を行った。なお、5 週目と 15 週目で学生に大きな差は認められなかったため、特別な処理は行っていない。選択理由項目が記述式のアンケートは、それぞれの授業に特有な内容が多かったため、今回の分析からは除外した。

各教員が設定したアクションプランの内容と学生の自由記述欄の分析²には MeCab Ver.0.996(工藤 2013³)と KH Coder Ver.2.00f⁴(樋口 2004⁵, 2014⁶)を用いた計量テキスト分析を行った。

結果

I. アンケート実施件数

本年度は 1 学期 12 件、2 学期 25 件、合計 37 件の「5 週目・15 週目学生アンケート」が実施されたが、これは昨年度実施件数 41 件を下回り 4 年連続の減少となっていた。また、多くの授業で昨年度と同じ教員が「5 週目・15 週目学生アンケート」を実施されていたことから、実施授業件数を増やすこととともに、実施していただく教員数を増やすことが今後の課題である。

II. 全授業共通質問の分析

¹平成 25 年度共通教育実施機構会議活動報告書 http://www.kochi-u.ac.jp/_files/00094290/25hokoku.pdf

² Web アンケートシステムが出力した pdf ファイルからのテキスト抽出が困難であったため、Web アンケート実施分については本年度の分析から除外した。

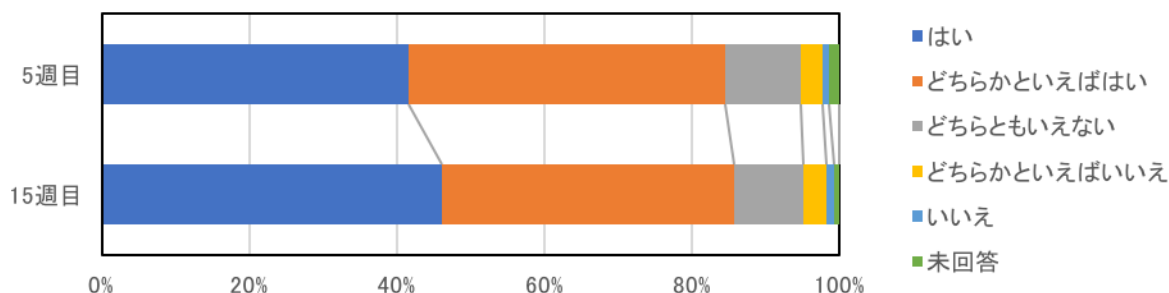
³工藤拓. 2013. MeCab: Yet Another Part-of-Speech and Morphological Analyzer. <http://mecab.googlecode.com/svn/trunk/mecab/doc/index.html>

⁴樋口耕一. 2001-2015. KH Coder. <http://khc.sourceforge.net/>

⁵樋口耕一. 2004. テキスト型データの計量的分析 -2つのアプローチの峻別と統合. 理論と方法 19: 101-115.

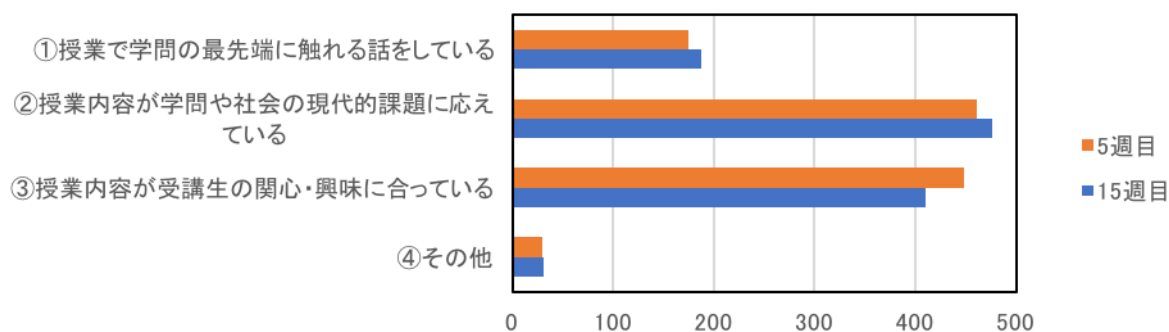
⁶樋口耕一. 2014. 社会調査のための計量テキスト分析. 内容分析の継承と発展を目指して. 233pp. ナカニシヤ出版. 京都.

1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか？



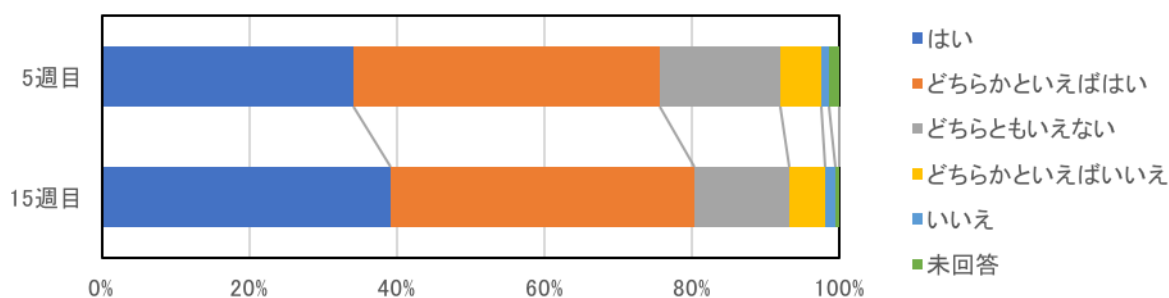
15 週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」の割合が減少していた。授業内容が「受講生の学問的関心や知的好奇心を高める」ものとなっていると考えられる。

1-2. 選択理由(複数選択)



「①学問の最先端に触れる話をしている」と「②授業内容が学問や社会の現代的課題に答えている」の回答数は 15 週目で増加していた。一方で「③授業内容が受講生の関心・興味に合っている」は 15 週目で減少していた。これらの結果は、回を追うごとに授業内容が高度化し、ついていけなくなった学生が増加しているためだと考えられる。

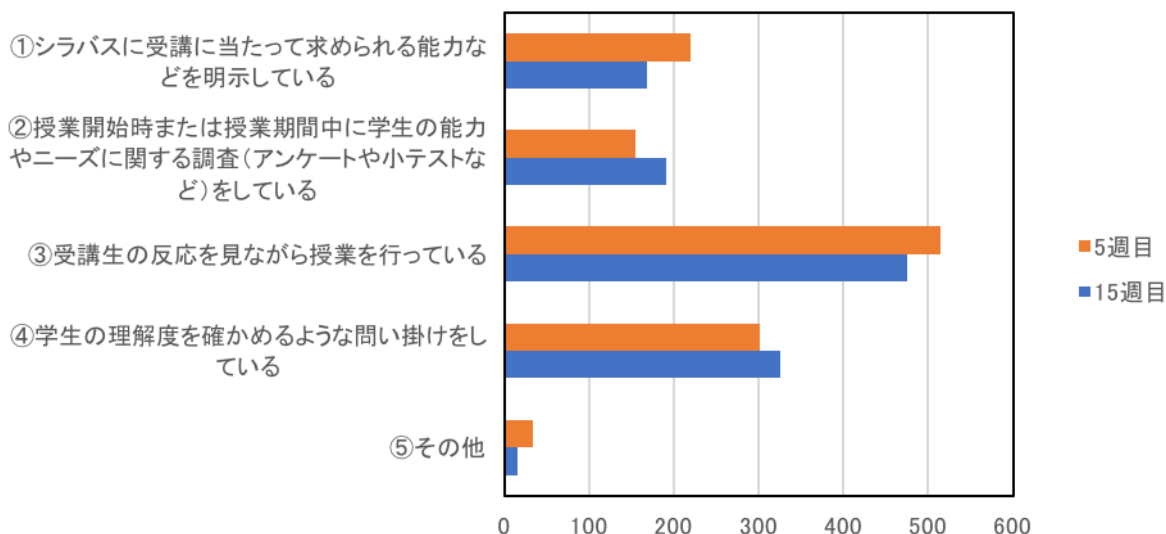
2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか？



15 週目では「はい」の割合が増加し、「どちらともいえない」の割合が減少していた。このことから、教員は 5 週目以降、それまで以上に「受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行って

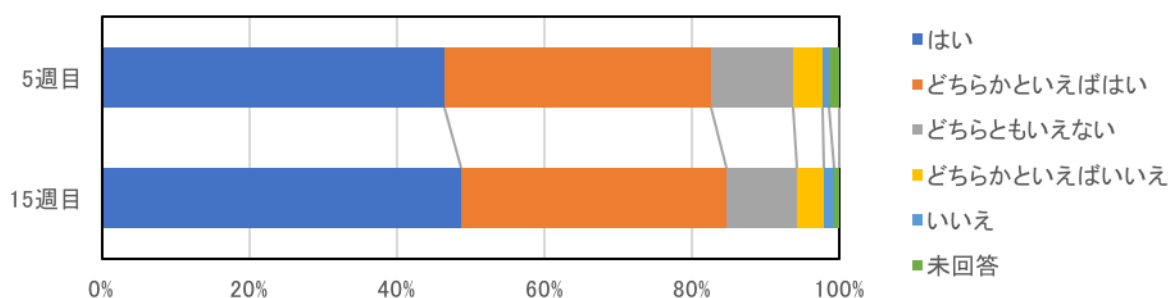
いる」ことが分かり、そのことが学生に伝わっている十分に伝わっているものと思われる。

2-2. 選択理由(複数選択)



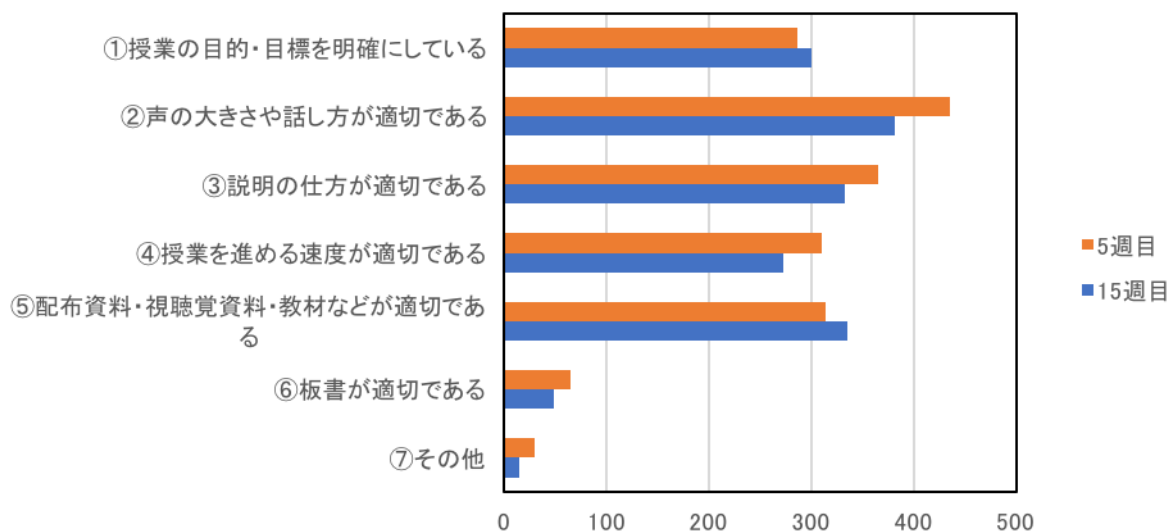
「②授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査をしている」と「④学生の理解度を確かめるような問い掛けをしている」の回答数が 15 週目で増加していた。これは本アンケート調査の影響も大きいものと思われる。これに対し、「①シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示している」と「③受講生の反応を見ながら授業を行っている」の回答数が 15 週目で減少していた。これは、回を追うごとに授業内容が高度化するため、授業開始当初に比べて学生の抱く授業難易度が高くなっているためと推察される。

3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか？



15 週目では「はい」が増加し「どちらともいえない」が減少しており、肯定的な意見の割合が増加していた。一方で「いいえ」もわずかに増加しているものの、否定的な意見の割合にはほとんど変化がなかった。これも授業内容が高度化し、その内容についていけない学生が増加しているためだと考えられる。

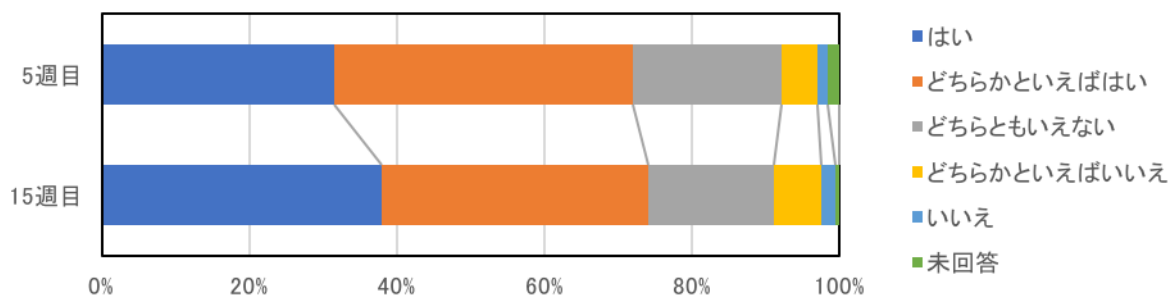
3-2. 選択理由(複数選択)



15週目では「①授業の目的・目標を明確にしている」や「⑤配布資料・視聴覚資料・教材などが適切である」が増加していた。授業内容の高度化に合わせ、教員側が資料等を工夫しているものと考えられる。

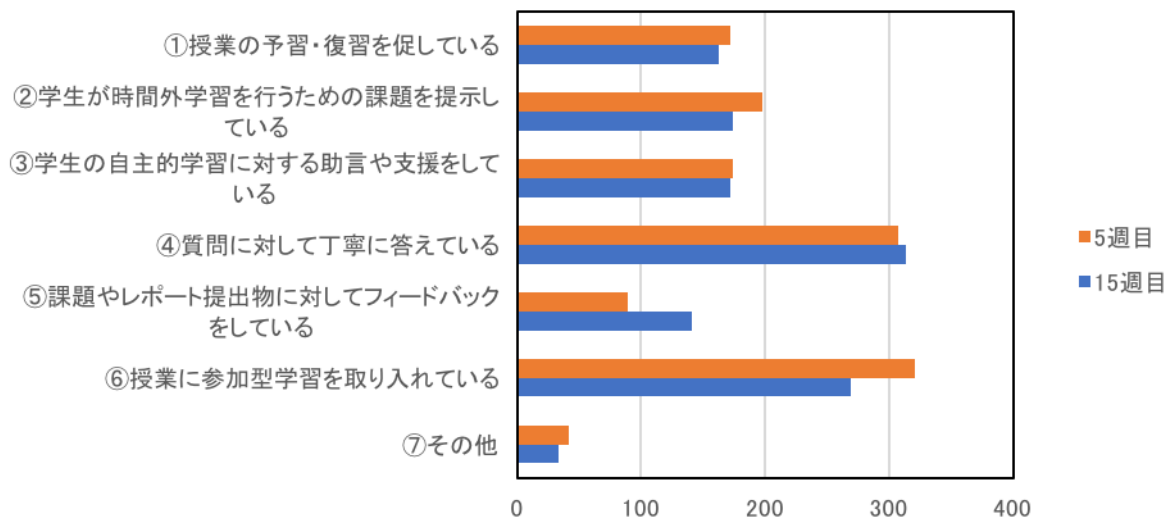
しかしながら、「②声の大きさや話し方が適切である」や「③説明の仕方が適切である」、「④授業を進める速度が適切である」が減少していた。この結果は、これらの事項が学生に十分浸透し、特に取り上げるまでもないと考えているのではないかと推察される。

4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていますか？



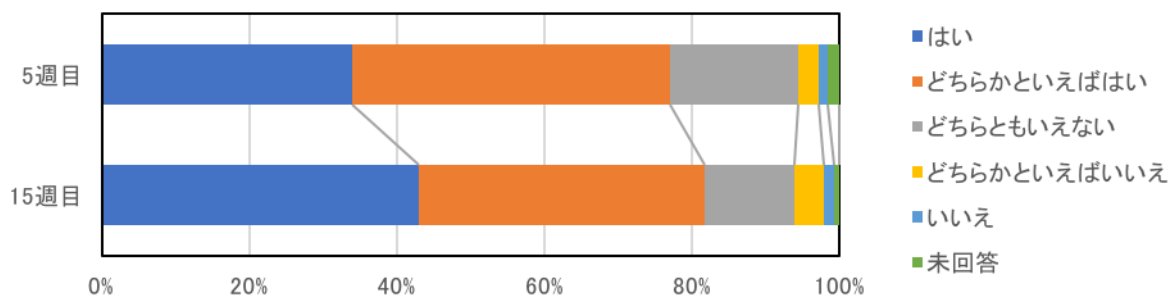
15週目では「はい」の割合が増加するとともに「どちらかといえばはい」や「どちらともいえない」の割合が減少していた。このことから、教員はこれまで以上に「受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫」を行っていることが分かる。しかしながら、15週目で「どちらかといえばいいえ」の割合も増加していた。これも、回を追うごとに授業内容が高度化し、それにその内容についていけない学生が増加しているためだと考えられる。

4-2. 選択理由(複数選択)



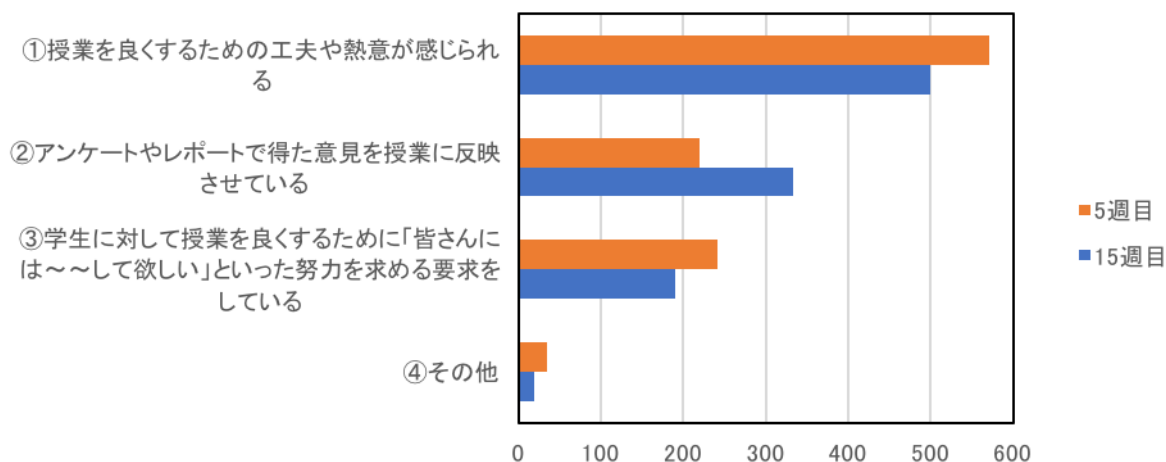
15 週目では「⑤課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている」が増加していた。教員側の工夫や熱意が学生に伝わっていることが分かる。一方で「⑥授業に参加型学習を取り入れている」が大きく減少していた。当初から参加型学習を取り入れている授業では、学期後半になると、それを当たり前と感じている学生が増加したのではないかと考えられる。

5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか？



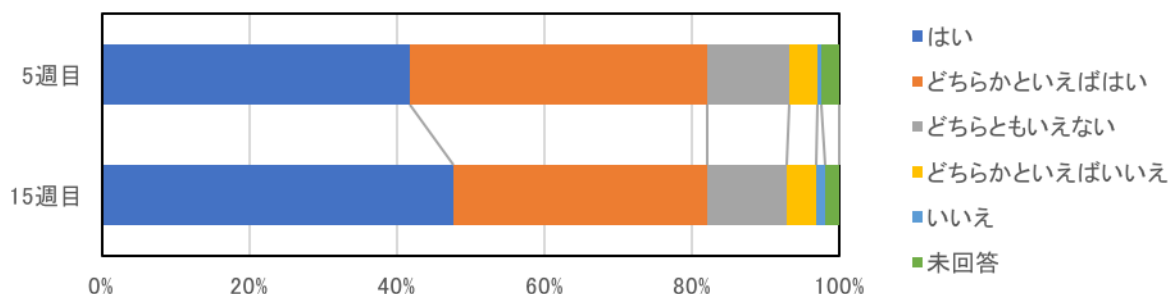
15 週目では「はい」の割合が増加するとともに「どちらともいえない」の割合が減少していた。教員は5 週目以降、それまで以上に「授業をより良くするための試み」を行っていることが分かる。一方で、「どちらかといえばいいえ」の割合がわずかに高くなっていった。一部の学生には教員が行った試みがうまく機能していない可能性もある。

5-2. 選択理由(複数選択)



15 週目では「②アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させている」が増加していた。このことから、教員は授業改善アクションプランを含む受講生からの意見を授業に取り入れていることが分かる。一方で「①授業を良くするための工夫や熱意が感じられる」や「③学生に対して授業を良くするために「皆さんには～～して欲しい」といった努力を求める要求をしている」は減少していた。これらの結果から、当初から熱意ある授業が行われており、学生はそれが当たり前と感じているものと思われる。

6. この授業は、総合的に考えて満足がいくものだと思いますか？



15 週目では「はい」の割合が増加していたことから、教員側の様々な努力が結実しているものと考えられる。しかしながら、「はい」と「どちらかといえばはい」2つを合わせた割合は、5 週目と15 週目では変化がないことから、満足度を高めるためにはさらなる授業の工夫が必要であると考えられる。

7. 全学共通質問のまとめ

全学共通質問は、すべての項目において 5 週目の時点で肯定的回答である「はい」あるいは「どちらかといえばはい」の割合が 70～80%に達していた。「5 週目・15 週目学生アンケート」を実施している多くの授業は、授業開始当初から学生評価が極めて高いことが考えられる。そこで、5 週目のデータから授業ごとの学生回答パターンを調べるため、PC-ORD 7.01⁷を用いて似たもの同士をまとめ上げ

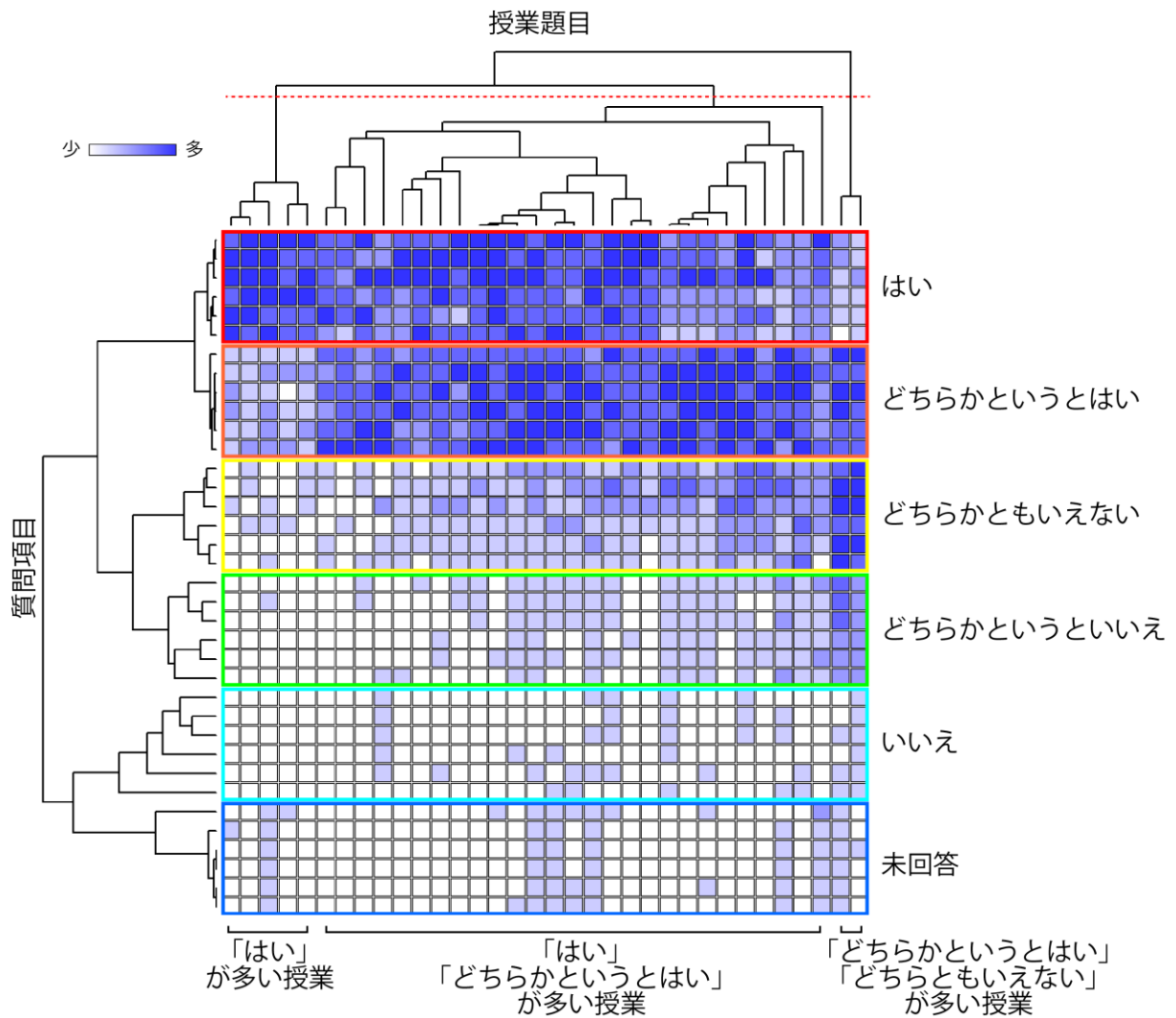
⁷ McCune, B. and M. J. Mefford. 2015. PC-ORD. Multivariate Analysis of Ecological Data. Version 7.01. MjM Software, Gleneden Beach, Oregon.

るクラスター分析を行った。

その結果を以下に図示する。横軸は授業題目(具体的な授業題目名は削除している)を、縦軸は質問項目(簡略化のため具体的な質問内容は削除している)を示す。小さな正方形は各項目を表し、青色が濃いほどその項目が多いことを、白に近いほど少ないことを意味する。

質問項目では、赤色枠で示した「はい」のクラスター、オレンジ色枠で示した「どちらかというとはい」のクラスター、黄色枠で示した「どちらともいえない」のクラスター…のように綺麗な 6 つのクラスターに分けられた。また、「はい」、「どちらかというとはい」の回答がその大部分を占めており、「どちらかというといえ」、「いいえ」という否定的な回答はともとも少ないことが分かる。

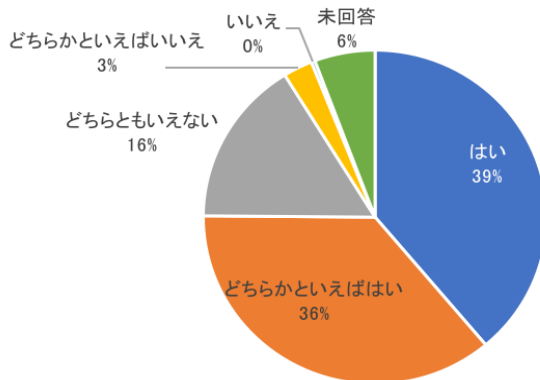
授業題目では、赤の破線で示した位置で(1)「はい」が多い授業、(2)「はい」、「どちらかというとはい」が多い授業、(3)「どちらかというとはい」、「どちらともいえない」が多い授業、の 3 つのクラスターに分けられた。「はい」が多い授業クラスターは、数名～十数名の小規模なものに限られ、学生とのコミュニケーションも密に行われているものと思われる。「はい」、「どちらかというとはい」が多い授業クラスターは、「5 週目・15 週目学生アンケート」を実施した大部分の授業が含まれる。このように、多くの授業は授業開始当初から学生評価が極めて高いことが分かる。



授業題目と質問項目のクラスター分析結果。詳細は本文を参照。

III. 授業改善アクションプランの効果

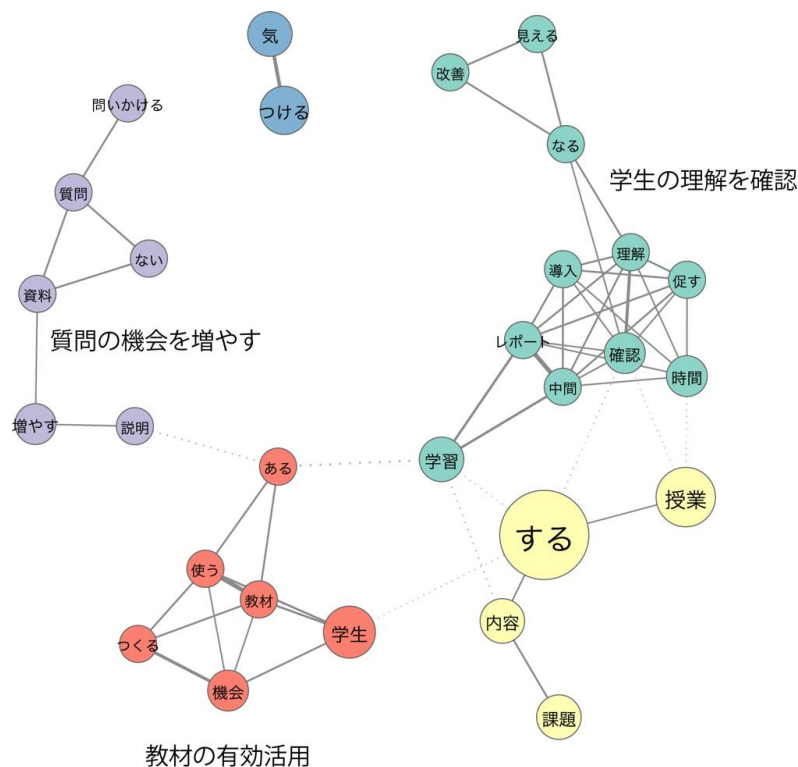
1. 授業改善アクションプラン「〇〇〇」は、授業をより良いものにするために効果がありましたか？



本年度は総計 27 件(1 授業あたり 0.7 件)のアクションプランが作成・実施された。この結果、75%の学生が「はい」か「どちらかといえばはい」を選択していた。これに対し、否定的な意見はわずか 3%となっていた。これらのことから、授業改善アンケートの実施やこの結果を踏まえて各教員が提示したアクションプランが一定の成果をあげているものと考えられる。各教員が 5 週目で得られたアンケート結果をしっかりと分析し、効果的なアクションプランを作成し実行していたものと考えられる。

一方で、本年度は 22 件の授業でアクションプランの作成が行われていない。これは、多くの授業で昨年度と同じ教員が「5 週目・15 週目学生アンケート」を行っており、それぞれの授業における改善点がある程度見出されているためだと思われる。このことは、後述の「V. 自由記述欄の分析」からも分かる通り、学生から示される改善点が少なくなっていることも影響していると考えられる。

これらの結果から、長年続けてきた「授業改善アクションプラン」を総括するとともに、内容を見直す時期が来ているものと思われる。今後、さらなる議論を行っていく必要があるだろう。



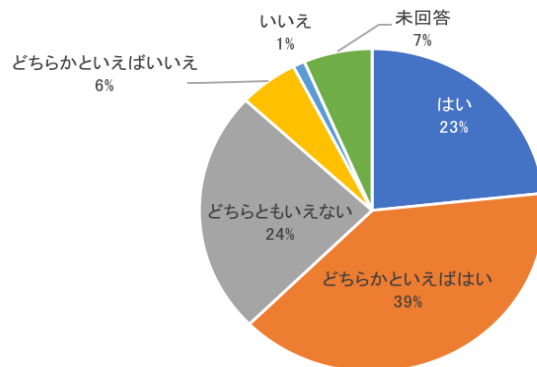
各教員がどのような傾向のアクションプランを作成していたのかを調べた。今回はまず MeCab により形態素(意味の最小単位)に分割し、2 回以上出現した形態素について、その出現回数や文章内での出現パターンの類似性(共起)をもとに KH Coder により共起ネットワークを作成した(上図。文章内での出現パターンが類似した語について集団を形成するようまとめ、識別された集団ごとに色分けしている。各項目の円のサイズは相対的な出現頻度を表し、円が大きいほど出現頻度が高い。各項目を結ぶ線の太さは類似性の強さを示し、破線は弱い類似性を意味する。)。

この結果、本年度は

1. 学生の理解の程度を把握する
2. 学生が教材を有効に活用する機会を設ける
3. 問い掛けなどを行うことで質問の機会を増やす

に関するアクションプランが多かった。次年度以降の参考にして頂きたい。

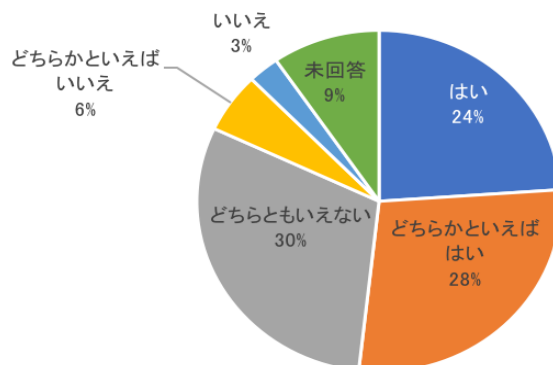
2. あなたは「●●●●●」を達成できたと思いますか？



本年度は総計 115 項目について、授業の目標達成状況が調査された。これは1授業あたり3.1項目で、多くの教員が本アンケートを受講生の達成状況把握にも活用していたことが分かる。この結果、62%の学生が「はい」か「どちらかといえばはい」を選択しており、学生自身は授業目標に概ね到達していると考えていることが分かる。

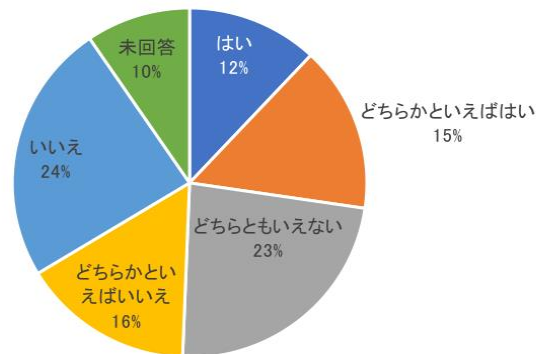
IV. 授業改善アンケートの効果と負担

1. 授業改善のためのアンケートに回答することにより、受講生の声によって授業が改善されたと感じますか？



本年度は 52%の学生が「はい」か「どちらかといえばはい」を選択していた。これに対し、否定的な意見は 9%となっていた。授業改善アンケートの実施やこの結果を踏まえて各教員が提示したアクションプランが一定の成果をあげているものと考えられる。しかし、「どちらともいえない」と回答した学生が 30%にも達することから、アクションプランを作成する際、各教員が 5 週目で得られたアンケート結果をしっかりと分析し、より効果的な内容にしていく必要があるとともに、その達成に向けたさらなる努力が必要であろう。

2. 授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか？



アンケートに負担を感じている学生は 27%であるのに対し、負担を感じていない学生は 40%であった。また、23%の学生が「どちらともいえない」と回答していた。

一昨年度から、アンケートの負担軽減を目的に、

1. KULAS を用いて受講生にアンケート内容の事前通知
2. 教員への十分なアンケート回答時間の確保の要請

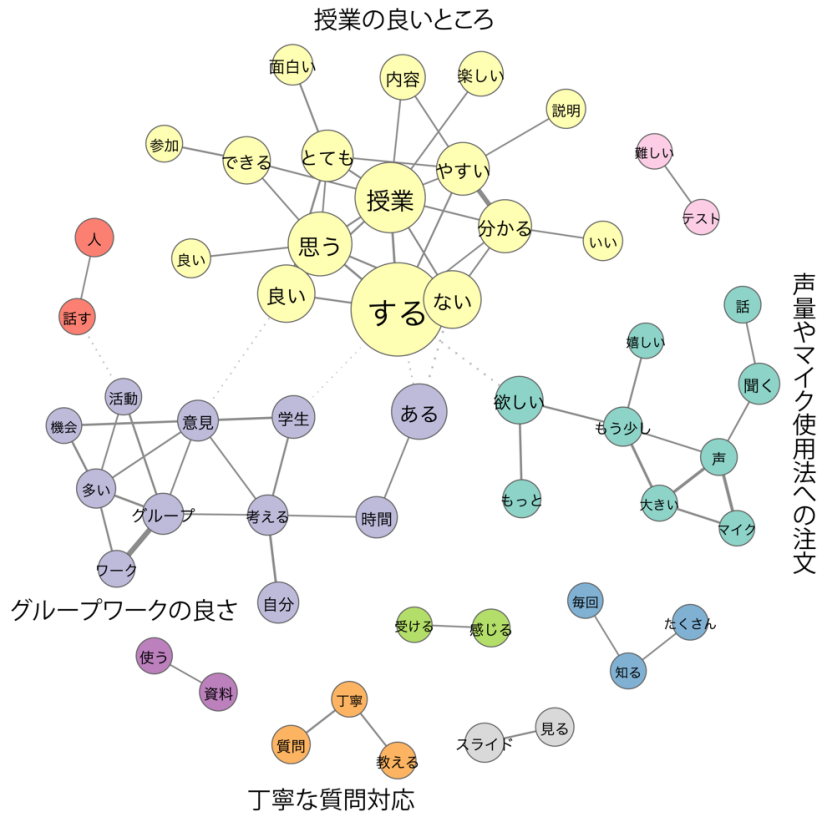
を行っているが、これまで十分な効果は得られていない。アンケート負担軽減に向け、さらなる対策が必要であろう。

なお、アンケートの効果と負担についての項目は、他項目と比較して未回答数が多かった。これはアンケート用紙の裏面に質問項目があるため、それに気づいていない、あるいは裏面は 5 週目と同様に「自由記述」のみと勘違いしている学生がいるためと思われる。次年度からは学生に対し、裏面にもアンケート項目があることをしっかりと周知したい。

V. 自由記述欄の分析

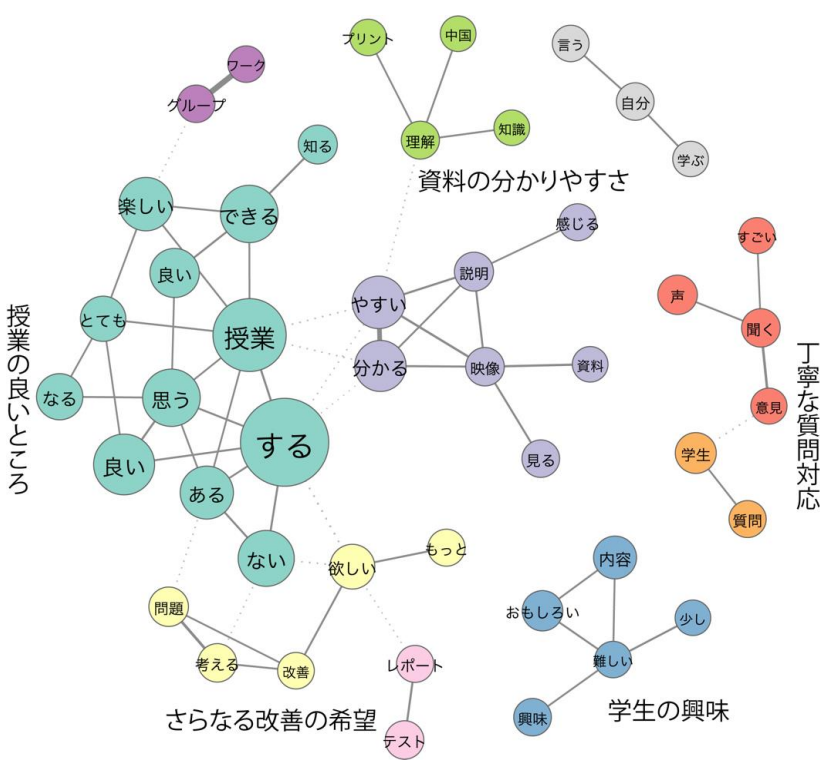
自由記述欄には、学生が感じた授業に関する様々な事項やアンケート項目にない意見、時に辛辣な意見も多く記載されている。そこで、今回は 5 週目と 15 週目でどのような違いがあるかを分析した。記載された内容には個人的な事項が含まれていたものも多く、まずこれらを除外した。次に自由記述欄に記載された文章を MeCab により形態素に分割した。10 回以上出現した形態素について、その出現回数や文章内での出現パターンの類似性をもとに、KH Coder により共起ネットワークを作成した。

・5 週目の自由記述



5 週目の自由記述では、授業の良いところやグループワークの良さ、丁寧な質問対応など、肯定的な点が具体的に記述されていた。一方、改善点として声量やマイク使用方法が目立った。

・15 週目の自由記述



15 週目の自由記述でも、5 週目と同様に授業について良かった点が具体的に記述されていた。また、15 週目では授業についての技術的な問題点の指摘はなくなり、特に 5 週目で指摘されていた声量とマイク使用方法については、教員側の努力により改善されたものと思われる。一方で、さらなる改善を求める声も少数ながら認められた。

まとめ

本年度の「授業改善アクションプラン」は、昨年度と比較し実施数が微減したものの、アンケートの分析からは一定程度の教育効果をあげていることが明らかとなった。また、5 週目の自由記述から授業の良かった点が抽出されていることから、授業担当教員は学期当初から様々な工夫を凝らしているものと考えられる。

一方で、アクションプランを作成・実施する授業数が減少傾向にある。また、「5 週目・15 週目学生アンケート」を実施した大部分の授業は、授業開始当初から学生評価が高く、現在のアンケート項目で明らかにできる改善点は少ない。このことから、長年続けてきた「授業改善アクションプラン」そのものを根本的に見直す必要があるかもしれない。この件は今後、本部会で議論して頂きたい。

また、27%の受講生がアンケート自体を負担に感じていることも明らかとなった。今後もさらなる改善が望まれるとともに、学生からの情報収集方法について、アンケート以外の方法も模索する必要がある。

IV. FD部会

FD部会長 立川 明

28 年度活動の概略

共通教育FD部会が実施するFD活動について、アンケートによるニーズ調査、開催時期調査を1学期末に行った。その結果を基に、2件のFD研修を実施した。

FD研修の企画実施について

共通教育FD部会を7月14日に実施した。FD部会メンバーの決定時期が遅くなり、開催時期が毎年この時期になるため、一学期中のFD活動は各分科会で実施してもらうより方法が無い。各分科会のFD実施計画は、年度計画を基に作成されておらず、年度計画と連動した取組をお願いしたところ、委員から2度手間との指摘があった。次年度以降、計画立案に際して年度計画に連動した取組計画を立てていただきたい。

1学期末にFD研修会のテーマについてのニーズ調査と、FD開催時期についての希望調査を行った。10名の教員からの回答が得られた。回答していただいた皆さんに感謝いたします。この結果を基に、次の二件のFDを実施した。

12月8日 14:50 127室 「高知大学のICT機器を使う」

参加者 4名

2月22日 14:30 212室 「大規模クラスでもできるアクティブラーニングの手法」

参加者 8名

参加者増が引き続きの課題である。2回目のFDについて、実施後アンケートを行った。質問項目は以下の通り。FD実施後、メールで質問項目を配信し、回答を返信してもらい、事務で集計していただいた。

~~~~~

共通教育FD実施アンケート

質問1

今回の研修「大規模クラスでもできるアクティブラーニングの手法」では、以下の4つの事柄について実習を交えて説明をいたしました。それぞれについて、よく分かったと思われる場合は5、よく分からなかったと思われる場合は1として5段階で数字で評価をお願いします。

1. グループの作り方・・・・・・・・・・( ) ←数字を記入して下さい。
2. 雰囲気作り・・・・・・・・・・( )
3. 出席の取り方・・・・・・・・・・( )
4. フィードバックの受け方・・・・・・・・( )

## 質問2

分かり難かった点があれば、具体的にお教えてください。

## 質問3

すぐにやってみたいことがございましたか？

もしあれば具体的にお書きください。

## 質問4

改善が必要なことにお気づきであればお教えてください。

開催時期、教室の状態、配付資料、

ご希望の研修テーマ等何でもけっこうです。

~~~~~

アンケート集計結果

質問1に対する回答 (平均)

1. グループの作り方・・・・・・・・・・ (4.44)
2. 雰囲気作り・・・・・・・・・・ (4.44)
3. 出席の取り方・・・・・・・・・・ (4.44)
4. フィードバックの受け方・・・・・・・・ (4.22)

質問2 分かり難かった点についての回答

・グループは固定式がいいのか、座席指定制なのか、質問にもありました同じ疑問をもっていました。

・フィードバックの受け方は、あまり課題として考えてこなかったもので、ぴんとこなかったのかなとも思います。

質問3 についての回答 (すぐやってみたいこと)

- ・自己紹介、確認のためのクイズ、導入のクエスチョン (サンデル先生式の)
- ・4人でA4 1枚にブレインストーミングしていく方法は、国語教育をテーマとしたクイズなどの時に使ってみようと思いました。
- ・グループを固定せずに変えていたのですが、来年度は変えずにやってみようと思いました。
- ・大好きマップ、授業の内容につながるアイスブレイキング
- ・グループの作り方を最初の授業で実践したいと思いました。
- ・授業の組み立て、Lit、ふりかえりをグループ共有
- ・大教室での授業ではないが、「大好きマップ」を使ったグループ作りを次年度担当予定の課題探求実践セミナーで利用しようと考えています。

質問4 についての回答 (改善点)

- ・好きなもののプリントを書き込む用と保存用を用意していただけると存分にメモを取れる。ア

クティブラーニングの実際の授業動画があるともっとイメージしやすいと思います。

・複数回受講しておりますので、各講義で方法が重複しないと、もっと「引き出し」が増えてありがたいです。

・「高知大学の ICT 機器を使う！」の FD にも参加したかったのですが日程が合いませんでした。来年度も開催していただきたいです。

・TBL の講座を受けてみたいです。今年度行けなかったのですが、moodle でどういう授業をされてるのかも知りたいです。

・実際に授業を見学するなかで気がつくこともたくさんあるだろうなと思います。

・問題ありません。まずは学んだことを実践してみたいと思います。

・大教室でもグループワークはやれないわけではないことは理解できました。ただ、現実の 200 人近い授業をよくよく考えると、グループ作りに使う成績などの順位付けをどうするのか、毎回同じ席に座らせることに付随する問題、受講取り消し期間内にグループが崩れる問題、その他いろいろ気になる問題もあり、これらをクリアしていくのは簡単ではないように感じました。

また、グループワークに適する授業とそうでない授業という違いはやはりあるように思うので、自分が担当している授業の中で、グループワークのために授業内容を絞り込むのか本当に良いのか、について吟味してみたいと思います。

まとめ

おおむね好意的な評価と意見をいただいた。今回は大教室でできる学生を授業に参加させる手法をいくつか盛り込んで研修を行ったが、この研修を基にアクティブラーニングに対する関心も持ってもらえたようだ。文科省が高大接続の中で入試改革とアクティブラーニングの導入を求めてきたこともあり、特に大学教育の入り口となる共通教育では、アクティブラーニングの導入が必要となると思われる。アクティブラーニングに関心を持ってもらえたのはよかったと思う。

研修にワークショップを取り入れることで、参加者に共通体験をしていただくことは、内容理解に適した方法であるため、教員研修でも学生向け授業でも教育の場では望ましい手法である。研修をやっても何も残らないことがよくあるので、研修によって変化したことやすぐやってみることを確認することには意味がある。質問 3 に対して多くの参加者が前向きな回答を下さったことが重要であると考えられる。大学教育学会では、先攻してアクティブラーニングを導入している大学や研究者が中心となり、評価の問題について取り組んでいる。一方、アクティブラーニングを取り入れている教員数は増えているのにアイスブレイキングをしないまま授業をしている教員も多い。質問 3 に対して、アイスブレイキングについて言及していただいたことはうれしい結果である。アクティブラーニング導入に関係なく、教室を安心・安全の場にすることは全ての授業に求められる。これが提供できないと、学生は能動的になりにくい。質問をしても誰も手を上げないのは、周りの学生や教員に緊張感があるからである。多くの授業でアイスブレイキングが導入されることを期待する。

質問 4 に対する回答につついて、すぐに対処できることについてはメールで再度、参加者全員にお伝えした。TBL（チーム基盤型学習）については、授業の様子を撮影したものを公開している。また大学教育創造センター発行の Tips もあるので、URL をお知らせした。

高知大学大学教育創造センター Tips のページ

<http://www.kochi-u.ac.jp/daikyo/publication/tips.html>

→Tips5 「TBL（チーム基盤型学習）で授業改善」

<http://www.kochi-u.ac.jp/daikyo/publication/pdf/Tips5.pdf>

高知大学 Moodle

<https://moodle.cc.kochi-u.ac.jp/>

→Web 版教員 FD コンテンツ（高知大学所属教員限定，ログインが必要）

<https://moodle.cc.kochi-u.ac.jp/2017/course/view.php?id=3927>

→アクティブラーニングの手法

<https://moodle.cc.kochi-u.ac.jp/2017/course/view.php?id=3927§ion=3>

→TBL 授業の様子（動画）

<https://moodle.cc.kochi-u.ac.jp/2017/mod/resource/view.php?id=622>

V. 広報部会

広報部会長 山崎聡

1 本年度広報部会の構成委員

部会長：山崎聡（教育学部）

霜田博史（人文学部） 三宅尚（理学部） 森木妙子（医学部） 山根信三（農学部）

霜浦森平（地域協働学部） 前西繁成（TSP）

2 本年度部会の活動方針

広報誌『パイプライン』の発行（年 2 回）、電子化した『パイプライン』の読まれ方に関する調査を行う。

3 本年度部会の活動報告

3-1) 概要

広報部会活動計画についてメール会議を開催した。

電子化した広報誌『パイプライン』の読まれ方について、Google アナリティクスによってアクセス数を確認し、分析検討した。

『パイプライン』第 48 号を 12 月に発行、第 49 号を 3 月に発行（予定）した。

3-2) 部会議事と関連会議事項

・第 1 回部会（メール会議：平成 28 年 5 月 29 日～6 月 6 日）：議題 1 『パイプライン』第 48 号発刊計画および平成 28 年度活動計画について

・パイプライン発行にあたって、48 号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、了承された。

・今年度の活動計画と予算案について諮り、了承された。

・特集は、ローテーションにより、分科会「大学基礎論」「課題探究実践セミナー」「学問基礎論」とした。

・第 2 回部会（メール会議：平成 28 年 11 月 22 日～11 月 29 日）：議題 1 『パイプライン』第 49 号発刊計画について

・パイプライン発行に当たって、49 号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、了承された。

3-3) 本年度の審議内容の概要

3-3-1) 『パイプライン』発行業務の自己点検・評価について

『パイプライン』の読まれ方を、Google アナリティクスによるアクセス数の調査で実施した。アクセス数は平年並みといったところで、あまり人口に膾炙しているとはいえない。現在『パイプライン』の発行のアナウンスは教職員用グループウェアでの掲示のみとなっている。アクセス数増加のためには、（例えば）教職員および学生へ直接メールして告知するという策も必要かもしれない。

3-3-2) 『パイプライン』の編集・発行について

- ・第48号を平成28年12月にHPに掲載した。
- ・特集は分科会で、「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」「学問基礎論」であった。
- ・教養の頁は、ローテーションに基づき、人文学部であった。
- ・FD部会報告
- ・共通教育実施機構委員会からのお知らせ
- ・第49号の編集を行った（発行は3月の予定）。
- ・特集は、「初年次科目」であった。初年次科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等
- ・学生記者(各学部7名 計14名)：原稿400字程度。原稿料1500円(支払書類要)、院生も可。※原稿料は、学生委員会活動に対する謝金という形で支出する。
- ・教員(7名)：各学部1名 原稿800字程度
- ・学生委員会の記事は、従来有名無実化が指摘されていたこともあり、廃止となった。

4 次年度(以降)の課題

- ・共通専門科目が廃止されたことに伴い、『パイプライン』の特集のローテーションが変更となった。端的には、1ターン分抜け落ちたので、変化に乏しく、ややワンパターンなローテーションとなる懸念が生じる。この点を鑑みると、編集方針を再考すべき時期に来ているように思われる。
- ・例年かつ毎度のことだが、執筆期限が遵守されず、刊行が大幅に遅れる態様が後を絶たない。『パイプライン』に原稿執筆することの意義を再確認・周知するとともに、意欲的に執筆できるような編集内容(構成)へと高めていく必要がある。
- ・『パイプライン』アクセス数増加のためには、全学への周知を強化するとともに、新入生オリエンテーションの際に何らかのアナウンスができれば良いと思われる。

VI. 分科会報告

1. 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 藤原 滋樹（理学部）

1. 平成 28 年度カリキュラム編成

「大学基礎論」では大きく〈大学で学ぶとは〉〈社会はどのような力を求めているか〉〈地域社会における高知大学の役割と意義〉を大学初年次の早いうちに認識し、更にコミュニケーション能力、プレゼンテーションスキル等も習得してもらう演習主体の授業という大枠は決まっているものの、具体的内容は各学部に応じられ、実施されている。28 年度に実施された各学部の内容は以下のようなものである。

人文社会科学部：

人文科学コース：全体講義の後、個別クラスにわかれ、論理的思考力と論理的に書く力・話す力を同時に身につけることを目標に、大学での「学び」に必要な基礎的技術の養成を行った。
国際社会コース：前半は学生生活を送る上での基本的な情報、大学での学びのための初歩的なスキルについて講義を行った（2 回は学外からの講師を招いた）。後半は、少人数のクラスに分かれて本を読み、発表・議論し、レポートを作成するという演習形式の授業を行った。
社会科学コース：10 名の教員がローテーション型で、本を読むことを中心とした演習形式の授業を行った。

教育学部：

昨年度に引き続き、本講義を実習系授業全体の基礎講座と位置づけ、教員養成の基礎となる内容の講義を実施した。「授業科目の主題」を、（1）教師をめざすモチベーションを持てるようにする、（2）教師に求められる能力の基礎を理解する、（3）地域と教育学部のかかわりを理解する、（4）グループ・ワークのスタイルを身につける、と設定している。本講義は課題探求実践セミナーの内容と連動して実施されており、これまで受け身的に学ぶことが主体だった学生に、教師になる上で身につけなければならないさまざまな問題について積極的に考える機会を与えたと考えられる。

理学部：

「理学部で学ぶことの意義」（学部長）の講義の後、学外講師による講演 3 回、「4 年間で有意義に過ごすために」（副学部長、学科長の 4 名）の講演を実施した。各講演の翌週には毎回、7 クラスでの少人数グループワークを通して、学びの姿勢の転換、コミュニケーション能力の獲得、社会の中の大学の位置づけ等の認識を促すカリキュラムを編成した。また、残りの講義回ではこれまでの講義内容を踏まえ、グループごとにプレゼン資料を作成し、発表を行い、学生間で相互に評価をした。講義 2 回目に行なうアドバイザー教員との面談では、アドバイザー教員制度や教員との連絡の取り方の説明とともに、アドバイザー教員が履修・日常生活についての相談を担うことの周知、レポート等における剽窃・盗用に関する注意喚起を通じた早期の倫理教育、英語力の確認・強化をはかるための TOEIC 受験の推奨が行なわれた。また、前半 8 回の授業のうち 4 回以上欠席した学生、もしくは 6 月初めの 2 回の授業（6/1, 8）を連続して欠席した学生に対して、アドバイザー教員による面談を再度実施した。

医学部：

専門職教育の色合いが濃い医学部では、よき医療人を養成する目的に沿ったテーマに改編するとともに、医学科・看護学科が併設されているメリットを活かし、合同授業として実施して

いる。テーマは「患者さんの視点から見た医療」、「望ましい医療サービス」、「プロフェッショナルリズム」である。授業形態は、各テーマについて「講義 → グループ討論 → 発表」を3クール繰り返した。グループ討論ではクラスを20グループに分けてチューターが指導に当たった。グループ発表は5グループずつ4教室に分かれて実施し、それぞれ1人の教員が担当して授業の運営と評価を行った。最終日には本学を卒業した若手医療従事者2名と学生との対話を行った後、期末試験として最終レポートをまとめさせた。

農林海洋科学部：

農林海洋科学部では、改組を機に、従来の「農学部版」大学基礎論が全面的にリニューアルされた。農林海洋科学部版ともいべき新しい「大学基礎論」の立ち上げに当たっては、担当教員間での『農林海洋科学（という学問領域）成立の必然性』の議論から始まった。この必然性を説明できる人間が今どこかにいるのか？存在意義を明示できないような学部では、学生に科学を教えられないわけがない！自問自答しつつ、自らも担当教員として参画し、これらの問いを周りに投げた新学部長の言葉が新「基礎論」の出発点となった。

具体的には、(1) 学部の設立理念を提示し、農学と海洋科学が融合する必然性について理解させる (2) 大学人・科学を学んだ社会人にふさわしい振舞い方を身に着けさせる (3) グループワーク（以下、GW）の手法を用いて、自分自身の意見の表明・他人の意見の論理的理解・複数の意見の取りまとめによるグループとしての意見形成に取り組みせ、わかりやすく説得力のあるプレゼンテーションに至る一連のプロセスを複数回体験させる、以上のことが開講前に担当教員間で共有された。

授業の特徴はとにかく講義の回数を増やしたことに尽きる。特別講義（学部長・学務委員長・学部内文化系教員）に加え、5回の基本講義を期間中盤に据えた。特に後者では、新入生に農林海洋科学部の「基礎の基礎」がしっかりと教授された。講義後、固定脚の大教室（212番）にも関わらず班ごとに座席を指定してGWの時間を確保するとともに、全体での質疑応答にも十分に時間を割いた。講師－学生間の思いのほか活発な議論に学生は大いに刺激を受けるとともに、司会を担当した教員を驚かせた。これら8講は大学基礎論に「農林海洋科学原論」的な内容を盛り込むには十分であった。もちろん、従来型のGW＋プレゼン（3教室に分かれて実施）も期間中に6講分（2サイクル）しっかりと確保された。

これまでのGW型の大学基礎論のよいところを活かしつつ、講義の回数を増やすことを通じて、物部教員が独自に進化させた「大学基礎論」について紹介・報告させていただいた。

地域協働学部：

地域協働学部の大学基礎論は、高校までの学習とは全く異なる大学での学びについて、次の3つの達成目標を掲げている。

1. 大学で学ぶことの意義と目的を考える。
2. 卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。
3. 社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。

これらの目標を達成するために、大学基礎論では、学部のカリキュラムを念頭においた4つの人材像に対応しうる方を外部講師（合計8名）として招いた。外部講師のレクチャーと振り返りを通して、大学4年間の学びの在り方や地域を取り巻く情勢について知見を得ることが出来た。また、4月初旬に合宿を行うことで、学生間および専任教員と学生における密接な人間関係の構築を目指すと共に、学びの目標とアクションプランを立てさせている。

土佐さきがけ：

受講生は、グリーンサイエンス人材育成コース、国際人材育成コース、生命・環境人材育成コースの3コースに属する16名で、大学幹部による講義と2回のグループワークとプレゼンテーションを行った。授業目標は、(A)他者から教わるだけでなく、自身が学びとる姿勢への

転換を図ること、(B)土佐さきがけプログラムの特色と意義、社会が求める力と社会における高知大学の役割と意義を理解すること、(C)グループワークを通じて相手の話をよく聞き理解して、自分の考えを分かりやすく伝える双方向のコミュニケーション力とプレゼンテーション力を向上させる、の3点である。それぞれの講義のテーマは、「大学で学ぶとは（倫理教育を含む）」「国際化とは何か」、「地方創生における大学」、「あなたも国際人になれる」、「私の研究について」である。2回のグループワークでは、「大学での学びのまとめ」と「高知大学の役割と自分たちができること」をテーマとした。グループ毎に課題探求の対象を論議し、各々が探求し考察した成果をプレゼンテーションすると共に、全員による質疑応答と相互評価を行った。最後に「4つのC、私の実践」をテーマに自らの個人目標をレポートとして作成した。

2. 自己点検評価活動について

人文社会科学部：

3コース間で内容が異なるが、3コースともに担当者間での自己点検評価活動が行われている。人文科学コースでは、担当者が(1)授業の概要(2)学生の取り組み具合(3)授業の成果(4)問題点や今後の反省点(5)その他、の項目で報告者を作成し、担当者間で情報共有がなされている。社会科学コース、国際社会コースでは、15回目に学生に授業アンケートを実施した。

教育学部：

学生へのアンケートによる授業内容の意見聴取を実施した。

理学部：

昨年と同様に、学生との動向を把握するために、アドバイザー教員との面談を講義2回目に実施し、昨年同様に出席状況をKULASに入力し、出席状況を共有することにより欠席者への指導を丹念に行った。また、前半8回の授業のうち4回以上欠席した学生、もしくは6月初めの2回の授業(6/1, 8)を連続して欠席した学生に対しては、アドバイザー教員による面談を再度実施した。第1週目および第15週目に授業評価アンケートを行った。

医学部：

プロフェッショナルリズムについて考えさせるテーマで使用するトリガービデオの内容を、終末期医療で問題になっている「胃瘻」を中止すべきかどうか考えさせるテーマに変更し、看護学科の学生も同じ医療人として社会的・倫理的な問題に取り組ませることができた。

大学基礎論自己分析アンケートの集計結果ならびに授業評価アンケートの結果から、本授業は学生からの評価が高いため、現在のやり方を踏襲して良いと考えている。

農林海洋科学部：

平成28年度は担当するクラス間での授業参観・授業評価アンケート・自己分析アンケートを実施した。ここでは、自己分析アンケートの結果に基づき、簡単に授業の検証を行った。自己分析アンケートには、第1講と第15講に同じ項目(①～⑥)が容易されており、以下それらの比較結果を示す。①具体的な出来事にぶつかって、これまでの自分の思考や態度を振り返る点(「省察力」)では、第1講では3.71ポイント、第15講では4.04ポイントとポイントの上昇が認められた。また、②失敗や困難に対して常にpositiveに行動し続ける意欲(「前向きな行動力」)は、同様に3.51→3.98であった。③グループや仲間と何かをしようとするときに自分の考えを伝える話ができるかについては(「伝達力」)、3.06→3.70と大幅な上昇がみられた。一方、同様な状況で、逆に、④他人の考えや意見を理解するように努力するか(「理解力」)は3.90→4.26であり、上昇幅は若干鈍った。⑤組織・チームの中で自分の素養や能力を生かす場を見つけられるか、すなわち、「組織の中での自分の存在」を見出すことができるかについては、3.02→3.62であった。最後に、⑥自分が身につけようとしている能力が、社

会の中でどのように役立つものなのかを意識して様々なことに取り組んでいるか（「社会とかかわり」）については、3.25→3.75であった。以上、まとめると、③と⑤が特に増分が大きく、大学基礎論の受講を通じて、自分自身をより高められるようになったと推察されるが、他人の理解という点では、今しばらく時間が必要のようである。ただ、総じてポイント数の絶対値は決して低くなく、農林海洋科学部でリニューアルされたばかりの「大学基礎論」であったがそれなりの授業の効果は得られたといえよう。

地域協働学部：

授業評価アンケート結果を受けて、自己点検を行った。その際、上述した達成目標1に設問1・2、目標2に設問3・4・7・8・9、目標3に設問5・6がそれぞれ該当することから、これらの回答に着目し下記の通り考察した。

まず全体の傾向として「どちらともいえない」の回答が多い。58名の回答者のうち最低でも9名（設問4）、最高で24名（設問5）が選択している。「将来像はあるが具体的なところは描けていない」「できたような、できなかったような」等、限定的な達成感や自覚に至っていない様子が、コメントから伺えた。

次に「どちらとも～」を除いて集計すると、設問5・6・8を除いた全ての設問で、7～8割が「はい」「どちらかというとはい」と回答している。少なくとも目標1・2は概ね高い評価を得ていると言えよう。他方で、設問5・6・8では「位置づけはよくわからない」「高知大学というより地域協働だった」「手法を習得できなかった」等のコメントが見受けられた。これらの設問は「どちらとも～」の回答が24名・21名・22名と他の設問と比しても高く、多くの学生が効果を判断することに迷ったことが伺える。以上を踏まえると、特に目標3に係る面について、単純化しすぎず考えを促しうる解説を行う等、今後の授業における工夫の余地をも感じさせられた。

しかし、講義全体の満足度としては、平均で7.5点を超えている。これは決して低い数値ではない。上記したとおり目標1・2・3についても一定の到達を見たといえるだろう。以上を踏まえ、これまでの方針を踏襲しつつ改善すべき箇所はすることで、次年度に活かしたい。

土佐さきがけ：

授業の進行並びにカリキュラム全体の進行と調整は、国際人材育成コースの前西を中心として各コース教員が協力して行うことができた。特に、自己紹介など個人毎に与える課題内容や整理に関する指示、グループワークにおいて探求すべき課題や目標の設定に関する指示、地域情報の提供とインタビュー対象となる人物と事象に関する指示など、初めてグループワークを体験する受講生を誘導するシステムが構築できたと思われる。今後はさらに各コースが持つ多彩な専門分野を、学際的領域横断的に探求の対象として活かすことを検討したい。

3. FD活動等について

人文社会科学部：

3コース間で内容が異なるが、3コースともに担当者間でのFD活動が行われている。

国際社会コースでは、FDミーティングの中で、大学基礎論に関する課題の検討がなされている。今年度は特に、修学に困難を抱える学生について話し合われた。

社会科学コースでは、5回目、10回目、15回目終了時に担当者FDを開催し、授業内容、授業方法等について話し合われている。

教育学部：

授業開始前の3月16日（水）、17日（木）に、アドバイザー教員によるFD会議を開催し、本年度の授業計画に関する確認及び修正、仕事分担の確認等を行った。さらに、全授業終了後

8月2日(火)に、アドバイザー教員によるFD会議を再度開催し、今年度の成果と反省、来年度への展望を検討した。今年度の実施内容は昨年度のものを踏襲しており、教員になることを目指している学生に、その基礎知識を学ばせるという目的は十分に達成できたと考えられる。

理学部：

演習クラスにより担当教員が異なるだけでなく、同じ演習クラスでも複数の教員が担当していることから、大学基礎論の取りまとめを行なっている米村学務委員長および藤原応用理学科長を中心に各担当教員間の意思疎通をはかり、スムーズかつクラス間で差が生じないよう公平な授業運営を心がけた。

医学部：

5月6日(金)と12日(木)の18:00~19:00まで大学基礎論チューター研修会を開催し、担当チューターのファシリテーション力向上を促した。また、授業評価アンケートの自由記載欄に目を通し、授業計画の改善策を検討した。コメンテーターに対するFDは実施できなかった。

農林海洋科学部：

開講前に授業の構成そのものを全面的に見直したため、それに多くの時間を割かねばならず、FDの実施までには至らなかった。開講後は、担当教員で積極的に意見交換を行うとともに、頻繁に相互授業参観を実施した。また、講義内容を充実させるために、講義改善策の提案、改善意識の向上を図った。

地域協働学部

毎回の授業で地域協働学部教員(複数名)によるピア・レビュー、授業参観によって本授業のFDを行った。授業に関する分析と教育効果の検証を随時確認してきた。本学部は新設学部であるため、授業計画も内容も時間をかけて試行錯誤し、授業を良くしていく必要がある。

土佐さきがけ：

グループワークに関する学生アンケートを実施した。そこから把握される課題は次のとおりである。①聞くことは相当できているが、全員がよく発言するレベルにはまだ達していない。②グループワークの意義は理解しつつも各人の満足度の向上には必ずしもつながっていない。③グループ毎の差が相当大きい。次年度のグループワークにおいては、グループ毎の相違に注意しつつ、全員が意見を言えているかを確認しながら、満足度を高められるよう指導していきたい。

2. 課題探求実践セミナー分科会

—カリキュラム編成活動—

課題探求実践セミナー分科会長

俣野秀典（地域協働学部）

1. 平成 29 年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部へ依頼し、それ以外のセミナーについては各担当者に授業実施を依頼した。

平成 29 年度開講授業題目

人文社会科学部開講セミナー	6 題目
教育学部開講セミナー	1 題目
理工学部開講セミナー	3 題目
医学部開講セミナー	2 題目
農林海洋科学部開講セミナー	1 題目
地域協働学部開講セミナー	1 題目
地域協働入門	3 題目
自由探求学習	2 題目
学びを創る	1 題目
学びを考える	1 題目
国際協力入門	1 題目

(※定員は授業ごとで異なる)

2. 平成 30 年度への課題

担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

平成 28 年度に開講された課題探求実践セミナーでは、昨年度と同様の形式での受講生によるセルフ・アセスメントと授業評価アンケートを実施した。その集計結果をまとめる。

セルフ・アセスメントにおいては、32 の項目からなるシートが用意され、この中で各項目について、授業の期首と期末それぞれの時点で、学生に 5 段階で自己評価させている。このうち肯定的評価として 5「熟達」と 4「やや熟達」を合計した割合に着目する。8 割を超える学生が肯定的に評価したものが設問 1「『答え』がない課題に取り組む意味を理解できる」(82%)、設問 15「他者と協力して物事に取り組むと良い成果が得られることが理解できる」(84%)、設問 16「自分のものとは異なる考え方や価値観を受け入れることも、自分やグループの成果に結びつくことがあるということが理解できる」(86%)、設問 21「『話したことは相手が受け取ったようにしか伝わらない』ことを理解できる」(81%)、設問 32「やってきたことを振り返り、その経験を活かして次のことに取り組むことができる」(85%)、の 5 項目であった。このうち、設問 15 及び 16 については授業前の段階で 6 割以上の学生が 4 以上の評価をしている。授業前後の割合の増加が最も大きい項目は設問 4「起こった出来事や現状を分析することで、その問題点や現状を分析することで、その問題点や課題を明らかにすることができる」(34%→74%)であった。全ての項目で 4「やや熟達」以上の回答率が増加しており、学生は成長を実感したことが窺える。

一方 5 割を切る学生しか肯定的に評価しなかったものが設問 23「自分の話を理解しているかどうかを確認できるように聞き手の表情や反応をみることができる」(44%)、設問 24「聴衆からの質問や意見に適切に答えることができる」(43%)、設問 27「説明を聞いて分かりにくいところを的確に質問できる」(49%)、の 3 項目であった。また、授業前後の割合の増加が最も小さい項目は設問 23 (42%→44%)であった。これらの点について改善の余地がある。

一方の授業評価アンケートでは、課題探求・問題解決に関する 8 項目、協働実践力に関する 8 項目について、能力を獲得する上で授業による効果があったかどうかを 5 段階で評価させている。今回は共通教育開講の 7 つの講義の結果について調べた。全ての項目で 4「やや熟達」以上が平均 6 割以上の評価を得ている。その中で低かったものは協働実践力に関する設問 3「相手やグループメンバーの意見をうまく引き出せるように配慮できるようになるために効果がありましたか」、設問 4「意見が食い違ったときにも粘り強く話し合うことで合意点を探ることができるようになるために効果がありましたか」であった。これらの小目はセルフ・アセスメントでも相対的に評価が低かった。自由記述の内容をみると、「自分だけで進めてしまうことがあった」や「意見があまり食い違わなかった」等のコメントがあった。グループワークの方法について改善の余地がある。

若松泰介（農林海洋科学部）

俣野秀典（地域協働学部）

本年度もFD関連のイベントへの参加はあまり多くはないが、担当者それぞれが自身の授業で「授業改善アクションプラン」や「スチューデント・フィードバック」に取り組んでおり、「授業改善支援プログラム」（大学教育創造センターによる支援）および「スチューデント・フィードバック」を前期・後期で実施している。

今年度の活動計画に記載されていた以下の5項目については、開催時期がずれたものも含めて項目1・3・4への参加が確認された。春季FDセミナーとして実施される「グループワーク研修」「ファシリテーション研修」は、課題探求実践セミナーをはじめとしたアクティブ・ラーニング系科目における教育力向上を意図されており、課題探求実践セミナー担当者の参加が無いことは課題といえる。昨年度参加のあった秋季FDセミナーへの参加者がゼロであり、全体的に昨年度に比べて参加が減少している。なお、分科会長が参加した外部セミナーの成果は、春季FDをはじめ全学FDにも反映された。計画にはなかった全学向けセミナー（大学組織を理解する）には5名、3月開催の特別プログラム（「学生主体」の授業デザインワークショップ）には3名の参加があった。

1. SPOD フォーラム（8月・愛媛大学開催）への参加。
2. 秋季FDセミナー（9月開催）への参加。
3. 外部セミナー（11月開催）への参加。
4. 全学FDフォーラム（3月開催）への参加。
5. 春季FDセミナー（3月開催・学内ファシリテーション研修）への参加。

課題探求実践セミナーは、教員が教え込む授業ではなくグループワーク型の授業であることから、OJT-FD教員の参加および受け入れが最も有効なFD活動の一つであると考えられる。昨年度に引き続いて「自由探求学習」「学びを創る」「学びを考える」それぞれにOJT-FD教員の参加があったことは成果である。来年度も、自由探求学習などチームビルディングに力を入れている授業への受け入れ、特に初回から3回目あたりに受け入れることで、学生の変容とファシリテーターとしての教員の役割を体感・体得できるように取り組んでいきたい。また、秋季に開催予定の「グループワークの技法」、春季開催予定の「グループワークのためのファシリテーション入門」双方のFDセミナーへの参加呼びかけを行いたい。

平成28年度のFD活動のうち、課題探求実践セミナー担当者（28もしくは29年度担当）が参加・実施した代表的なものは以下のとおりであった。

8月24-26日	SPOD フォーラム	5名
10月31日	大学組織を理解する	5名
11月3日	コーチングセミナー	1名
3月3日	全学FDフォーラム	13名
3月9日	「学生主体」の授業デザインワークショップ	3名

3. 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 市栄 智明（農林海洋科学部）

1. 平成 28 年度カリキュラム編成

「学問基礎論」は、各学部の専門教育の導入として、専門分野に必要な知識や素養についてグループワークを通じて学ぶとともに、日本語を含めたプレゼンテーション技法を身につけ、自律的な学びへの土台を築く役割を担っている。学問基礎論の授業形態や授業方法、及び教員の担当方式等は、各学部に任せられ、実施されている。平成 28 年度に実施された各学部の内容は以下のようなものである。

人文社会科学部：

コースごとに内容が大きく異なるため、以下、特に国際社会コースのケースについて述べていきたい。国際社会コースでは、2 年次から分属されるゼミに先立ち、2 クール各 6 回の「ミニ・ゼミナール」を行った。「ミニ・ゼミナール」は、個別教員のもとで決められた本（新書等読みやすいもの）を読み、発表・議論し、レポートを作成するという大学での基本スキルを学ぶ授業である。各クール最後の授業時（第 6 回目）には、担当教員からレポートについてのコメントを与えた。また、全体授業において「ゼミナール」や「プログラム制」を中心に、国際社会コースでの学びのあり方について説明を行った。

教育学部：

高等学校までとは異なり、大学で行う学問とは何か、またどのように進めていくのかについて、その基礎を学ぶ。前半は、30 分ずつ 6 名の担当教員が自らの学問分野について、紹介する。受講生は、それぞれの講義に対し、10 分程度で「その場でレポート」を書き提出する。2 名の講演の次の回はそれぞれの担当教員率いる班に分かれ、前回のレポートの内容について議論する。これを 3 回繰り返す。後半は、それぞれの班での活動を行う。学問における発信は、「書く」と「話す」とにより、行われるので、例えばあるテーマを決めて「ミニエッセー」を準備作成したり、「ミニエッセー」の内容をパワーポイントにまとめてプレゼンを行ったりした。

理学部：

理学部では、実施要領に記載されている教育目標のほか、学部・教育コースの教育目標も考慮して授業計画を立案し、授業を実施している。開講時期は初年次 2 学期である。授業の到達目標は、1) 「理学」全般に対する理解と再認識、2) 分属を希望する教育コースの専門分野の理解である。授業の前半では主に、各教育コースの紹介（理学部学生全員を対象）を実施し、授業後半にはコース別に演習を行っている（1 クラス 15～60 名（全 8 クラス））。演習の実施内容・方法等に関しては、レポート作成の基本や不正行為防止に関する講義をすべてのコースで実施していることを除き、それぞれのコースの担当教員に委ねられている。

医学部：

2010～2015 年の間、医学科の学問基礎論では、初年次教育で将来の医学専門分野を意識した講義を行ってきた。この間、学生の motivation を維持するという観点からは、学生の満足度も良好な結果であった。本年度からは、医学科が 2022 年に受審を予定している分野別国際認証に向けて、医学教育のグローバルスタンダードの中で重要視されている『行動科学』に焦点を当てた内容のコースとなった。後述のアンケート結果が示すように学生は高い満足度を示し

ているが、今後さらに充実させるべく検討を重ねていく予定である。

農林海洋科学部：

学部改組に伴い、今年度から農林海洋科学部の学問基礎論は、これまでの1学科8コースでの実施体制から、3学科（海洋資源科学科は3コースに分かれて）での実施に変更になった。内容も学科やコース毎に検討されたため、教員や外部講師が講義（講演）を行った内容を基に学生がグループワークを行う形式（農林資源環境科学科、海洋生命科学コース）、大まかなテーマ設定の下、課題の探索を含めて学生同士のグループワークを通じて行う形式（農芸化学科、海洋生物生産学コース）、講義を中心として専門知識の基礎を概論的に学ぶ形式（海底資源環境学コース）とそれぞれ異なる方法で実施された。それぞれの効果や問題点を検証するため、15週目に全ての学科・コースで同じ評価アンケートを実施した。

地域協働学部：

地域協働学部では、地域実習系の授業、学年論文を執筆することを最終課題とする研究授業、講義科目などを受講するが、文献講読にあたる授業は専門科目に存在しない。このことが、学生が自ら知識を獲得していく上で障害とならないよう、学問基礎論では文献を理解し、さらに批判的に検討することを位置づけた授業構成とすることにしてきた。初年度に地域マネジメントに関わる、かなり理論的な文献を読ませたが、学生の理解度にばらつきが大きかったため、今年度は文献の難易度を下げ、①用語の定義や概念規定を検討できる内容であること、②しかし平易な叙述であること、③内容の批判的検討にも到達しやすいものを基準として選書し、その書籍の内容の章毎の要点把握と、日本や諸外国の実態を踏まえた批判的検討の2つを反復する形で授業を実施した。この形式により、学生の授業への参加状況、理解度は初年度を上回ったと考えられる。今年度は、学生を30名ずつ2教室に分けて、それぞれ2名の教員が担当する形で実施した（昨年度は20名ずつ3教室）。また、各教室で5～6名のグループを編成して、グループワークの形で、文献の理解とそこから展開した論点に基づく情報収集を含む研究を行う内容として実施した。

土佐さきがけ：

[生命・環境人材育成コース]

TSP-LEの2016年度の学問基礎論日程は、学期前半の最初に①TSP-LE教員の研究分野の紹介と、②個人で興味を持てる研究内容の情報収集のためのTSP-LE教員の情報提供を行った。学期後半は、昨年度まで農学部学生に交じたグループワークであったが、今年度の農林海洋科学部への改組に伴って、教員や学生が共に関係深い農林海洋科学部農芸化学科学生43名に、さきがけ生6名を加えたグループワークを行い、課題検討・中間報告・課題整理を行った上でグループ発表・質疑応答並びに相互評価を行った。また最後に2学期間の活動を踏まえたレポート作成も行った。

[国際人材育成コース]

例年は国際人材として必要な英語力強化の授業を行っていたが、「地域関連科目」であることや履修者の約半数が外国籍の学生であることを考慮し、本年度は「キャンパス国際化をテーマ」に新しい取り組みを行った。一例として学内標識・案内図の英語化や視認性向上のためのデザインや設置場所等の改善策を検討し、施設企画課に提案書を提出した。

[グリーンサイエンス人材育成]

前半10回は講義形式および後半5回はグループ発表形式の授業を実施した。なお前半はコー

ス独自で化学系の様々な分野の教員がオムニバスで実施し、後半はコース学生数が少ないために理学部の化学系と合同でプレゼンテーションを行なった。

[スポーツ人材育成コース]

副専攻であるため、学生は各所属学部の当該科目を履修

2. 自己点検評価活動について

人文社会学部：

全体授業において、授業内容についての感想・コメントを記入してもらった。改善が必要な部分については、来年度担当者に引き継ぎたい。

教育学部：

前半の「その場でレポート」についての毎回の議論は、自己点検評価活動に相当する。

理学部：

演習クラス希望調査時にアンケートを行っている。また、一部演習クラスでは、「大福帳」を通し担当教員と受講者の間でコミュニケーションを深める取り組みをしている。

医学部：

2016年 学生アンケート結果（回答数 全体 109名：男性 73、女性 36）

質問	Yes + どちらかという と Yes 【全員】 (%)	Yes + どちらかという と Yes 【男性】 (%)	Yes + どちらかという と Yes 【女性】 (%)
臨床医学入門全体として興味が持てた	104 (95%)	73 (95%)	31 (94%)
内容は難しかった	47 (43)	41 (54)	6 (18)
授業の資料は適切であった	100 (92)	70 (92)	30 (91)
教員の話し方は理解しやすかった	103 (94)	71 (93)	32 (97)
教員の熱意は感じられた	103 (94)	72 (95)	31 (94)

講義への興味を持った

講義	Yes + どちらかという と Yes 【全員】 (%)	Yes + どちらかという と Yes 【男性】 (%)	Yes + どちらかという と Yes 【女性】 (%)
① 脳の働きと構造	102 (94%)	72 (95%)	30 (91)
② 記憶	102 (93)	71 (93)	31 (91)
③ 学習	101 (93)	71 (93)	30 (91)
④ 感情	100 (92)	71 (93)	29 (88)
⑤ 行動変容（慢性疾患）	91 (83)	63 (83)	28 (85)
⑥ 睡眠	97 (89)	69 (91)	28 (85)
⑦ 行動変容（禁煙）	92 (82)	64 (80)	28 (85)
⑧ 行動と疫学	86 (79)	62 (82)	24 (73)

⑨ 男女共同参画	76 (70)	51 (67)	25 (76)
⑩ ストレス	94 (86)	68 (89)	26 (79)
⑪ 脳と精神の障害	100 (92)	72 (95)	28 (85)

農林海洋科学部：

15週目に全ての学科・コースで同じ評価アンケートを実施予し、効果の違いを検証した。全ての学科やコースにおいて、学生の評価は概ね高い値を示した。中でも、複数の教員が講義をした研究内容や技術・知識に関して、学生が興味のある事柄を組み合わせ、グループで調べる調査(研究)テーマを作り、分担して文献を調べて過去の研究を調査し、情報集約を計り、発表資料を作成するという一連の作業を行った海洋生命科学コースの学生の評価が最も高かった。このアンケート結果を踏まえ、来年度の授業計画を検討していく計画である。

地域協働学部：

授業独自のアンケート等は取っていないが、各回の学生の参加態度の観察と、任意抽出した学生からの感想の聞き取りを行った。また、最終回には授業全体を通じて学んだ内容について発表を行わせ(成績評価の一環)、どの程度、文献理解が進んだか、それをどのように受け止めたかを確認した。このことは、文献に基づく学習の基本を理解させるという授業目的との関係で、授業評価としても十分に機能するものと考えている。

土佐さきがけ：

[生命・環境人材育成コース]

学問基礎論が進行中、一定期間後に①課題の仮題タイトル、②明らかにして伝えたい学習目的の整理、③知りたいこと、考えたいことの整理、④予定し想像した展開と結論をまとめた筋書きをまとめさせた。活動中の自己評価として、⑤自身の役割分担と進行状況、⑥情報収集法の整理、⑦授業時間外の情報交換の方法、⑧活動を通じて困ったこと、悩んだこと、迷ったことを整理し、自身の活動を振り返った。

[国際人材育成コース]

履修生の興味、能力、資質に適合した取り組みであるか、定期的に確認作業を行いながら授業計画を随時調整した。

[グリーンサイエンス人材育成]

コース長、あるいは副コース長や学務担当教員が受講生から直接講義内容やその感想を聞きとりし、次年度の授業担当教員の選別の参考とした。

3. FD活動等について

人文社会学部：

10月、2月の2回、教務委員会主催のコースのFDミーティングを行い、その中で「学問基礎論」の内容、ミニゼミの在り方、ミニゼミの問題点、出欠の管理の仕方等について意見を交換した。

教育学部：

特になし。

理学部：

学問基礎論分科会で行った各学部での取り組み内容について、学部内で報告し、次年度からの

学問基礎論の改善に役立てる予定である。

医学部：

学年末の学生授業アンケートや、各種レポートを含め、担当教員間で情報共有し、来年度の方針決定の議論に役立てる予定である。

農林海洋科学部：

評価アンケートの結果や学問基礎論分科会で行った各学部での取り組み内容について、各学科、コースの担当教員で共有し、次年度からの学問基礎論の改善に役立てる。

地域協働学部：

中間段階と成績評価の段階で、学生の授業への取り組み状況と各回でのグループワークの質などに関して意見交換を行い、中間段階では意見交換を通じて2教室を跨いで学習の質を担保・向上させるように、グループワークの運営や教員からのフィードバック内容の改善に努めた。

土佐さきがけ：

[生命・環境人材育成コース]

今年度は、最初に個人での情報収集と課題探索を行い、農芸化学科学生を交えたグループ活動を行った。大学基礎論でさきがけの国際人材など社会科学系の学生とのグループワークを踏まえて、学問基礎論では専門性の近い自然科学系の学生と活動へステップアップすることで、グループワークに馴染み易かったことと、グループ内で興味や課題を集約できる意見提供・意見交換などスムーズなコミュニケーションが取れるように、個々の教員の多彩な個性を活かした指導が行えたと考える。

4. その他

教育学部：

本授業で、4回生時の卒論に向けての準備基礎が望めると考えられる。論理的に議論を組み立てたり、先行研究と、自らの考察の区別を付けたり、かなり初歩的で重要なトレーニングの場にしていくと授業の効果が高まると考えられる。

医学部：

医学部で行ってきた学問基礎論のこれまでの変遷を下記にまとめる。

2016年に医学部医学科の学問基礎論の担当が、医学教育創造・推進室 高田から同室の藤田博一准教授に引き継がれた。今回の報告書には、本年度の教育内容と学生アンケートに加えて、医学科でのこれまでの学問基礎論コースの変遷についても記載する。

担当教員

2009 まで 佐藤純一 (専門：医療社会学 (元) 教授)

2010-2015 高田 淳 (専門：医学教育、循環器内科・老年医学)

2016 以降 藤田博一 (専門：医学教育、精神神経科)

●第一期 2009 まで (一学期開講) 佐藤純一 (元) 教授 (医療社会学)

学問基礎論のシラバスから

【達成目標】

- (1) 近代と近代学問の歴史的特異性を理解し、近代学問の基礎的方法論を学ぶ。
- (2) 世界 (現象) を「学問的」に把握する「学的感覚 (センス)」を習得する。

(3) 近代学問に共通の近代合理主義的な論理形式・推論形式を学び、今後の医学修得、将来の医学研究・医療実践に生かしていく。

本科目は、私たちが学んでいく（学んでいる）近代学問の歴史とその論理・方法・思想を、科学論（知識社会学）的視点から見ていく（議論する）「学問」論である。本科目の目的は、この学問論を議論することを通して、近代学問の文化的背景、論理構造、思想を理解し、近代学問の基礎的方法論（論理）を習得することである。

講義では、

- 1: 「学問的知」のありかた、そこにおける、言葉、概念、論理の意味を学び、合理性・客観性・実証性について検討する。また理論（学問・科学）と実践（技術）の関係についても検討する。
- 2: 近代という時代に出現した近代学問の方法、論理、思想を検討する。
- 3: 「自然科学」と「社会科学」の方法の共通と相異を見ていく。
- 4: 近代社会における近代学問のあり方を、社会的関係性の視点から検討する。
- 5: 社会における「合理性」を考え、正統的知と逸脱知の関係について検討する。

●第二期 2010～2015（6年間 一学期開講） 高田 淳

テーマ：臨床医学入門（循環器学中心に）、医学英語入門

医学部入学後、2年生以降学修する専門分野への興味を持ち、また全般的な学修意欲を維持することを目標とする。初年次の学習ではあるが、臨床科目の一つである循環器内科学の基礎学習を通して、特に臨床医学の学び方、考え方を身につける。また、今後医学を学ぶにあたって重要となる、医学英語の基礎についても学習する。

・2010年 講義内容

担 当	タイトル
高田	医学部で何を学ぶのか（総論）
高田	医療を取り巻く諸問題、医学史
老年病科 准教授	高齢者医療入門
保健管理センター 准教授	健康管理
高田	内科学入門、医学史
高田	循環器学入門
老年病科 講師	臨床研究入門
高田	性差医療入門
公衆衛生 准教授	ヘルスプロモーション
公衆衛生 准教授	ヘルスプロモーション
高田	チーム医療・専門医制度
高田	長寿医学
高田	まとめ
外部講師	医学英語入門
高田	1学期末試験

・2015年 講義内容

担 当	タイトル
高田	医学部で何を学ぶのか（総論）

6年生 BRIDGE 代表*	先輩からの話『医学部での生活』
高田	循環器入門（解剖・生理） 医学英語入門
保健管理センター 准教授	健康管理
高田	血圧について
高田	動脈硬化について
高田	虚血性心疾患
外部講師（内科医、漢方専門医）	東洋医学入門
高田	心臓弁膜症について
高田	心不全について
医師会 医師	男女共同参画の取り組み
高田	まとめ
高田	1学期末試験

BRIDGE*（カリキュラム等 医学教育改革に参画する学生組織）

●第三期 藤田博一 准教授（医学教育、精神神経科） 2学期開講

行動科学、行動医学入門

医学専門分野への興味を持ち、より高学年に向けての学習意欲を維持するために、行動科学の学修を通して臨床医学の学び方、考え方の基礎を身につける。

・2016年 講義内容

担 当	タイトル
藤田	行動科学 オリエンテーション
藤田	脳の働きと構造
藤田	記憶
藤田	学習
藤田	感情
藤田	睡眠
高田	行動変容（慢性疾患）
藤田	ストレス
総合診療部 医師	行動変容（禁煙）
環境衛生学 教授	行動と疫学
藤田	脳と精神の障害
医師会 医師	男女共同参画の取り組み
藤田	1学期末試験

4. 人文分野分科会

カリキュラム編成に関する報告

人文分野分科会長代理 大櫛敦弘（人文社会科学部）

1. 平成29年度の次年度カリキュラム編成の経過

(1) 平成28年10月4日の第4回共通教育実施委員会において平成29年度の共通教育に係る担当体制（案）が提示されたのをうけて、10月24日に分科会を開催しカリキュラム編成にとりかかることになった。

(2) 12月6日に平成29年度人文分野開講授業題目表をとりまとめて作成し提出、平成28年12月19日の第3回カリキュラム等編成部会、1月23日の第5回共通教育実施委員会においてそれぞれ承認された。近年、遅れ気味であった共通教育全体の編成スケジュールが、本年度は通常のそれに復したことで、比較的余裕をもった作業ができたことも特記されるべきであろう。なお、とりまとめに当たっては、分科会委員、共通教育係の各位に多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

2. 平成30年度カリキュラム編成に向けた課題

(1) 物部キャンパス開講にかかる平成29年度カリキュラムの編成作業

昨年度よりスタートした「社会分野との間で2科目と3科目とを交替・隔年で開講する」との体制の二年目にあたる29年度カリキュラム編成では、本分科会から3科目を開講することになっており、その担当体制について分科会で検討した結果、

1. 29年度は地理歴史、言語文化、哲学で1コマずつ開講
2. 今後、大きな状況の変化がないかぎり、当面は
 - ・地理歴史、言語文化から毎年1コマずつ開講する
 - ・分野で3コマ開講の年は哲学、心理学が交互に1コマずつ開講する
 - ・支障が生じた場合には芸術を含めて対応を検討する

という原則で担当してゆくことで合意を見た。従来、この問題については農学部との協議をはじめとして調整に多大の労力が費やされてきたが、これによって拠るべき規準ができたことになり、当面はこの面での作業は円滑化が期待される。一方で、「大きな状況の変化」が生じた場合の対応も想定しておくことが必要とされるであろう。

(2) 地域関連科目授業について

全学的に地域関連科目拡充の取り組みがなされている中、来年度カリキュラムにおいても一定数の授業を準備することができた。これについては例年の報告でも述べているように、「本分野の授業は毎年内容の変わるものが多いため、単純に前年度の数から積み上げてゆく性格のものでは必ずしもない」という事情を他分野にも広く周知して理解をえると同時に、一定の開講数を今後どのようにして確保してゆくべきかについて引き続き考える必要があると思われる。

(3) ノルマ負担の問題

人事をめぐる状況が厳しさを増す中、必要とされる授業を提供することの困難さは本分科会のみの問題ではないが、本分科会においてもきわめて重大な問題となっている。「荷重な授業負担の緩和」と「履修機会や授業の質の保証」とをどのように両立させるか、という難題は依然として悩ましい問題となっている。

自己点検・自己評価活動報告

【概要】

平成 28 年度の人文分野分科会は 2 つの自己点検自己評価活動をおこなった。

ひとつは授業改善アクションプラン（以下「改善 A P」と記す）の実施であり、1 学期と 2 学期あわせて 8 科目の授業でおこなった。もうひとつは、授業改善・授業評価にかかる学生アンケートに関する他大学での現状聞き取り調査である。

以下、後者の調査について、具体的な内容を報告する。

【調査の目的】

改善 A P とくに 5 週目・15 週目授業アンケートによる実施状況がかんばしくないこと（表 1 参照）に鑑み、たんにアンケートの実施率向上を目指すといった安直な話ではなく、今後あるべき議論のてがかりの一つとすべく、まずは当分科会として 5 週目・15 週目授業アンケートひいては改善 A P にどう向き合うかを考えるための材料を入手することであった。

【調査の概要】

調査日は平成 28 年 12 月 20 日、調査先は熊本大学である。同大学には専門科目もあわせた「授業評価アンケート」にかかる全学的なシステムがある。そのシステムの稼働及び改革を所掌する事務担当者（学生支援部学務課教育評価担当係長・野中菜穂美氏）に聞き取り調査をおこなった。また、教養教育（本学での「共通教育」に相当）人文科学系科目を念頭に、同科目を担当する文学部歴史学科世界システム史学コース西洋史学専攻の教員（三瓶弘喜准教授、中川順子准教授）および学生（3 回生 5 名）に聞き取りをおこなった。

【授業評価アンケートシステムの現状】

熊本大学には、全学的システムとしての授業改善アンケートが 2 種類、存在する。

ひとつは、最終回の授業でおこなわれるアンケートである⁸。その目的は「学生の視点からの個々の授業改善に資するとともに、組織として F D 活動に活用すること」、対象は「教養教育、専門教育及び大学院教育（修士課程及び博士前期課程の教育に限る）」、ただし最低実施基準として「①部局等の授業科目のうち履修登録者数 20 名以上（各研究科及び各教育部にあっては 10 名以上）のもの②3 年間で 1 回の実施」が定められている。なお、教養教育での同アンケート実施については、教養教育 F D 委員会が詳細を決めているとのことである。

この全学（教養教育、専門教育とも）で実施されるアンケートの内容は、全体に共通する設問（シート）と各学部等の追加設問（一部の学部等では、共通紙に加えてさらに 1 シートある）で構成される。教養教育で実施されているアンケート票（例）は【図 1】のとおりである。

実施要領に拠ると、最終回の授業は、①教員が終業 10 分前に授業を終了し、アンケート票を配布、②教員はアンケート票を回収する学生を指名して退出、③回答終了後、指名された学生はアンケート票を回収、④同学生は回収したアンケート票を所定の封筒に入れその場で封緘し、⑤教養教育の場合は学生支援部学務課に設置された回収箱に提出、という手順になる。

このアンケートの集計結果は「授業改善のためのアンケート結果公開システム」という学内限定ウェブサイトに掲出される。そこには、質問に対する回答の数的集計データとともに、自

⁸ 「授業改善のためのアンケート実施要領」（平成 16 年 11 月 29 日教育委員会制定；現行版は平成 28 年 8 月 3 日 F D 委員会一部修正）による。

由記述欄に書かれた文章もそのまま記される⁹。注目すべきは、次の段階すなわち学生の自由記述に対して担当教員が返答コメントを書く、とくに期末試験の採点基準等もあわせて返答欄に記すよう、奨励されていることである。このような手順をへたのち、教員からの返答を含むアンケートの集計結果は、アンケート実施からおおよそ2～3か月後に当該授業の受講生のみ公表される。

もうひとつのアンケートシステムは「学期途中アンケート」である。これは学内ウェブシステム上に設けられた各授業ごとの所定の記入欄に授業に関する改善要望事項などを書き込み、それを担当教員が把握して対応する、というものである。これは学生側からの要望に応える形で大学側が備えたシステムであったものの、実際にはほとんど利用されていないとのことで、平成28年度実施を最後にとりやめられることになった。

平成29年度にひかえている大きな変化として、この最終回授業のアンケートのウェブ化があげられる。これは、紙媒体でおこなっていたアンケートへの回答を、授業時間外に学内限定ウェブでおこなわせるというものである。アンケートの集約、発注、結果提示にかかる資源、経費、作業量を節減するため、すなわち効率化と省力化を図るために採用されたとのことである。

【運用・利用する立場からの意見など】

それぞれのアンケートシステムにかかわることがらについて、担当職員、教員、学生から、次のような証言ないし意見を得た。

学生の自由記述に対して教員がコメントすることを奨励されていることについて、担当職員によると、義務化されているわけではないのでどのような自由記述に対してもノーコメントの教員もいるとのことである。他方で、教員がコメントを書いても学生側が教員の返答を見ないケースが大半を占めるともいう¹⁰。担当職員によるこれらの証言は、聞き取りに協力してくれた学生の証言ともほぼ合致した。

アンケート実施と教員・学生のちぐはぐな関係は「学期途中アンケート」にも顕著に現れていた。上述のとおり学生側の要望によって作られたシステムであるにもかかわらず、利用する学生がほとんどいないこともあって平成29年度から中止されることになったが、聞き取りに協力してくれた学生のほとんどが学期途中アンケートの存在すら知らなかった。

なお、受講者数の多い（例えば200名前後）授業でも、出席確認の手段としてレスポンスカード（一言カードなど他の名称もある）を提出させることを授業担当教員が自発的におこなっており、そこに改善要望事項を書かせて対応するケースがけっこう多いとの証言が教員と学生の双方からでた。そうした個別の改善システムを通じて、「板書の字が見えにくいので工夫してほしい」や「声が聞こえにくいのでマイクを使ってほしい」といったことが出て、それに対応したり、対応してもらったりしたといった事例（経験）が語られた。

平成29年度からのウェブ化について、学生はまだ詳細を知らされていないようであったが、学生からは「授業時間外だと、回答し忘れるかもしれない」「かえってめんどくさい」「あまり便利だとは思わない」といった意見がでたいっぽうで、「もし、スマホでも回答できるようならば、便利になって良いかもしれない」という意見もあった。

⁹ ただし、著しく不適切な書き込み（誹謗中傷とみなされうるもの）については、実施機構側（FD委員会）により削除されているとのこと（担当職員談）。

¹⁰ サイトの閲覧回数から推測されるとのこと（担当職員談）。

【総括】

今回の調査により、アンケートを運営する事務方、教員、対応する学生という、それぞれの立場からの従来システムと新システムへの見方と現状の一端をとらえることができた。とくに、ウェブ化に関しては、省力化、効率化をめざすとはいえ、その準備には大きな労力と資金がかかることは避けられず、いっぼうでアンケートをおこなって得られる「実」の部分については、必ずしも抜本的な見直しや新たな展開が期待できるとは限らないような要素もみてとれた。

ただ、「(最終回) アンケートの結果やレスポンスが授業終了後に当該授業の受講生のみ公開されるのでは、開講中の授業改善には間に合わないうえに、次年度の同授業受講希望者がそれを参考にすることもできない」などといった課題も担当職員の方は適確に認識しておられたので、今後さらにシステム運用面でのブラッシュアップが図られることと見込まれる。

ご協力いただいた熊本大学の教職員ならびに学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

【表 1】高知大学共通教育人文分野での授業改善 A P アンケート*の実施実績

年度・学期	アンケート実施授業数	人文分野開講授業数 (ek4・知プラ科目除く)
H26-1	4	31
H26-2	6	37
H27-1	3	23
H27-2	0	22
H28-1	0	21
H28-2	3	26

*5週目・15週目アンケートの実施件数 (すなわち教員独自の改善 A P を含まない件数)

【図 1】熊本大学「授業改善のためのアンケート票 (教養教育用)」(例)

このアンケートは、大学の授業改善に役立てることを目的に実施するものです。アンケートに、あなたの学生番号・氏名を書く必要はありません。成績開示などについては、あなたが不明になることはありません。アンケートには、ホームページ上で公表されます。アンケート票は、全学共通の質問と、各学部等の質問とからなっています。熊本大学アカデミックイノベーション委員会

次の注意事項をお読みください。
 ①回答は印刷用紙(ネットプリント)を使用してください。
 ②訂正は、修正用ペン(ボールペン)で修正してください。
 ③回答にあたってはマークを完全に塗りつぶすこと。
 ④所定の場所以外には記入しないでください。
 ⑤回答用紙は折り曲げないこと。

※記入例 よい例 ● 悪い例 ● ×

多岐選択の質問については、1~4 または 1~5 の中からあてはまる番号を一つ選んで、マークシートの回答番号欄を HB の鉛筆で塗りつぶしてください。最後の質問については、あなたの考えを自由に書いてください。

1. 授業の満足度は、どうでしたか。 1. 非常に満足した 2. 満足した 3. ちょうどよかった 4. 少し満足した 5. 非常に満足しなかった	(1) (2) (3) (4) (5)
2. 教員の話は、聞き取りやすかったですか。 1. 非常に聞き取りやすかった 2. 聞き取りやすかった 3. 聞き取りにくかった 4. 非常に聞き取りにくかった	(1) (2) (3) (4) (5)
3. 授業の手段 (教科書・プリント・板書、映像視聴教材 (ビデオ、パワーポイントなど) 等) は、有効でしたか。 1. 非常に有効だった 2. 有効だった 3. あまり有効ではなかった 4. 全く有効ではなかった	(1) (2) (3) (4) (5)
4. この授業において、教員との双方向のやりとり(授業中の質疑応答、受講生のレポートへの教員のコメント、質問カードの明らかな返答、どの程度行われていましたか。 1. 十分に行われていた 2. 少し行われていた 3. あまり行われていなかった 4. 全く行われていなかった	(1) (2) (3) (4) (5)
5. 授業の目標は、どの程度明示されましたか。 1. 十分に明示されていた 2. 少し明示されていた 3. あまり明示されていなかった 4. 全く明示されていなかった	(1) (2) (3) (4) (5)
6. この授業は、シラバスに記載された目標と計画に沿って実施されましたか。 1. 実施された 2. どちらかというところ実施された 3. どちらかというところ実施されなかった 4. 実施されなかった	(1) (2) (3) (4) (5)
7. あなた自身は、授業の目標をどの程度達成したと思いますか。 1. 十分に達成できた 2. 少し達成できた 3. あまり達成できなかった 4. 全く達成できなかった	(1) (2) (3) (4) (5)
8. この授業は、LMS(Moodle等)を活用するものでしたか、活用するものであった場合は、どの程度役に立ちましたか。 LMS(Moodle等)を活用しなかった場合は「5」を選択してください。 1. 十分に役立った 2. 少し役立った 3. あまり役に立たなかった 4. 全く役に立たなかった 5. 該当せず	(1) (2) (3) (4) (5)
9. 大学の授業の単位は、授業時間の何割程度を単位として、取得することになっています。あなたは、この単位について、どの程度満足していますか。授業時間の何割程度を単位として、取得しなかった場合は「5」を選択してください。 1. 3時間以上 2. 2時間以上3時間未満 3. 1時間以上2時間未満 4. 1時間未満 5. 全くしなかった	(1) (2) (3) (4) (5)
10. 全体として、この授業はどの程度有意義でしたか。 1. 非常に有意義だった 2. 有意義だった 3. あまり有意義ではなかった 4. 全く有意義ではなかった	(1) (2) (3) (4) (5)

(教養教育担当の質問項目)*複数の教員が担当する科目形式の授業について質問します。

11. この授業は、教員1人1人の力量が十分に発揮されましたか。 1. 全くはかりませんでした 2. あまりはかりませんでした 3. ちょうどよかった 4. 十分に発揮されました	(1) (2) (3) (4) (5)
12. この授業の満足度は、全体としてどの程度満足していますか。 1. 非常に満足されていた 2. 満足されていた 3. あまり満足されていなかった 4. 全く満足されていなかった	(1) (2) (3) (4) (5)

授業改善のための意見
この授業で、よかった点、改善してほしい点を、具体的に書いてください。

ご協力ありがとうございました。

人文分野分科会では、分科会独自のFD活動として、一昨年度来「オーディオ機器を用いた自律的授業改善の試み」を実施してきた。

その内容は、「教員がICレコーダー、ビデオカメラで自分の授業を録音・録画し、授業後にそれを聴き、授業改善のための工夫をおこなう」というものである。

実施の趣旨は、「授業改善のための取り組みとしては、授業参観や授業評価アンケート等がおこなわれてきましたが、基本的に他者からの評価をもとに授業改善を工夫するという内容になっています。けれども、授業改善は各教員によって自律的になされることが基本だと思われます。教員による自律的な授業改善をうながす取り組みとして、教員が自分の授業を録音・録画したものを視聴し、授業改善のきっかけとしようとするものです」である。

一昨年度（実施は録音のみ）の事後研修会で、「各教員が毎年度継続的におこなう必要のあるものではないが、自分の授業の癖を自覚するうえで有効な手段となりうる」とされ、昨年度（録画も選択可）は、「自分の授業の録画映像を観ることには心理的な抵抗があり、実施をためらわせる要因となっている」ものの、「授業を第三者的な視点からチェックするための方法として有効ではある」と確認されたのを受け、本年度もこのFDを継続実施した。「各教員が、毎年度、継続的におこなう必要のあるものではない」との見解もあったが、毎回同じ授業を行っているわけではないことから回を重ねても発見はあるであろうこと、実施例を増やして行くことも意味のあることだと考えたためである。

1学期に人文学部1名（録音）、2学期に教育学部2名（録画）が実施し、1月23日に過去の経験者2名も加わって計5名で研修会を開催した。そこで出された意見には以下のようなものがあつた。

- ・録音のみだと予想していた癖の確認くらいだが、映像だと板書状況等も確認できる。
また、意識するのは最初だけだった。
- ・録画も角度を変えることであらたな発見がある。
- ・一度でも体験すれば、その衝撃が脳裏に浮かんでその後のふるまいに影響するので、やってみる価値はある。
- ・事前に意識するし、授業中も意識する、それがすでに改善になっている。
- ・参加しない人をどう引き込むか？
 - ・ある大学では、事務が録画して教員に渡し、その後の扱いは自由にしている。事務が無理なら、委員が録画して渡したらどうか。対処の仕方は当人の自由で、自分が変わるきっかけになればよい。
 - ・報告会なしならさらに敷居が低くなると思う。
 - ・報告会でも毎回同じような話になるから、それで参加が増えるならなくてもいいかも知れない。

5. 社会分野分科会

カリキュラム編成に関する報告

社会分野分科会長 霜田博史（人文社会科学部）

1. カリキュラム編成の経過

<平成 28 年 10 月～平成 28 年 12 月 カリキュラム編成作業>

基本開講数 61 コマについて、人文 30、教育 7、地域協働 24 と決定した。社会分野を担当する人文社会科学部（社会科学コース、国際社会コース）、教育学部、地域協働学部に次年度担当体制について依頼をし、担当者・時間割を調整し決定した。また、別途センター所属教員に次年度担当体制について依頼を行い、時間割を調整し決定した。

<平成 29 年 2 月 カリキュラム編成作業終了>

社会分野が担うべき基本開講数 61 コマの他に、各学部等の協力を得て多様な科目を開講するカリキュラムを編成できた。

上記の基本開講数に加えて、教養科目においては 22 題目（うち 4 題目は e-ラーニング）を人文学部、地域協働学部、地域連携センター、総合教育センター、国際連携センター、評価機構、安心・安全機構、全学教育機構等の協力を得て編成することができた。

平成 28 年度から共通専門基礎科目という科目区分が廃止されることになったが、27 年度以前入学の学生が 29 年度も十分科目履修できるよう、18 題目を人文社会科学部、地域協働学部の協力を得て編成することができた。

2. 平成 29 年度カリキュラム編成のポイント

- (1) 物部キャンパス開講科目については、27 年度の農学部教務委員会との協議を経て、人文分野と社会分野を合わせて毎年 5 題目開講することとなった。さらに、人文分野分科会との協議の結果、社会分野については、28 年度に 3 題目、29 年度に 2 題目を開講することになっていた。したがって、29 年度の物部開講数は人文社会科学部 2 題目とし、28 年度には開講されていた地域協働学部分については、29 年度は非開講とした。30 年度は社会分野の開講科目が 3 科目になるため、改めて学部間での協議が必要になる。
- (2) 共通専門科目として開講されていたが、学部専門科目に移行しなかったため、1 年次向けの授業でありながら、1 年生が受講できないという科目が出てしまっていた（地域経済概説）。事務方との協議を経て、次年度からは教養科目として読み替える措置をとることとした。

3. 課題

- (1) 28 年度から共通専門基礎科目については廃止されたが、読み替えによって学部専門科目に以降された科目も学部の基本開講数（ノルマ）としてカウントした。しかし、いずれ共通専門基礎科目として履修する学生はいなくなるので、今後のカリキュラム編成に際しては他分野との均衡なども考慮しながら、推移を見守る必要がある。
- (2) 教養科目の基本開講外の開講科目が 18 題目（e-ラーニングを除く）あり、基本開講数の半数近くに達している。多様な科目を提供するという観点からは歓迎すべきかもしれないが、センター関係の教員の増えていることなどから、各学部のノルマの見直しに結び付けるなどの対応も必要かもしれない。
- (3) 全学的改組が進行する中、各学部、センター等に配置される教員が増えてきており、共通

教育委員会として新規授業の開講をお願いしているところである。教養社会分野を担当できる教員数に合わせて、ノルマ等のあり方について検討すべきである。

(4) ー自己点検・評価活動ー

1. 平成 28 年度 自己点検評価活動の実施状況

平成 28 年度の共通教育社会分野における自己点検評価活動として、1 学期に「授業評価アンケートの実施 (5,15 週目)」を実施した。

アンケートを実施した授業は 3 科目で 3 人の教員がかかわった。アンケートは 3 科目共に、5 週目と 15 週目に行なわれた。

ちなみに昨年度 (27 年度) は 1 学期が 2 科目、2 学期が 13 科目の実施で、のべ 13 人の教員がかかっている。

2. 平成 28 年度 自己点検評価活動の結果

平成 28 年度の共通教育社会分野の授業評価アンケートの結果は以下の通りである。

(1) 第 5 週目アンケート (3 科目の合計) 結果

①結果 (問 1 から問 6)

問1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか	合計 (人)	%	問2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか	合計 (人)	%
はい	66	47.1	はい	52	37.1
どちらかといえばはい	58	41.4	どちらかといえばはい	52	37.1
どちらともいえない	9	6.4	どちらともいえない	25	17.9
どちらかといえばいいえ	3	2.1	どちらかといえばいいえ	6	4.3
いいえ	1	0.7	いいえ	2	1.4
未回答	3	2.1	未回答	3	2.1
総数	140	100.0	総数	140	100.0
問3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか	合計 (人)	%	問4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか	合計 (人)	%
はい	71	50.7	はい	44	31.4
どちらかといえばはい	45	32.1	どちらかといえばはい	54	38.6
どちらともいえない	15	10.7	どちらともいえない	32	22.9
どちらかといえばいいえ	4	2.9	どちらかといえばいいえ	5	3.6
いいえ	1	0.7	いいえ	1	0.7
未回答	4	2.9	未回答	4	2.9
総数	140	100.0	総数	140	100.0
問5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか	合計 (人)	%	問6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか	合計 (人)	%
はい	53	37.9	はい	61	43.6
どちらかといえばはい	59	42.1	どちらかといえばはい	59	42.1
どちらともいえない	22	15.7	どちらともいえない	12	8.6
どちらかといえばいいえ	3	2.1	どちらかといえばいいえ	3	2.1
いいえ	0	0.0	いいえ	1	0.7
未回答	3	2.1	未回答	4	2.9
総数	140	100.0	総数	140	100.0

いずれの設問についても、「はい」「どちらかといえばはい」を合計した割合が 70%台から 80%台程度となっている。受講生の多くは、教員が、受講生の知的関心・好奇心を高め、努力・

工夫して授業を行っていると感じていることがうかがえる。

一方で、「どちらかといえばいい」「いい」を合計した割合は非常に少なかったものの、問2についてはそれが5%程度あったことには留意すべきであろう。教員が、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業をしているとは感じられない受講生も、少数ながら存在していることは軽視できない。

②結果（問1から問5において、そのように答えた理由（複数回答可能））

質問1.について、そのように回答した理由（複数回答可能）	合計(人)
①授業で学問の最先端に触れる話をしている	16
②授業内容が学問や社会の現代的課題に込んでいる	89
③授業内容が受講生の関心・興味に合っている	56
④その他	6
質問2.について、そのように回答した理由（複数回答可能）	合計(人)
①シラバスに受講に当たって求められる能力などを明示している	29
②授業開始時または授業期間中に学生の能力やニーズに関する調査（アンケートや小テストなど）をしている	17
③受講生の反応を見ながら授業を行っている	66
④学生の理解度を確かめるような問い掛けをしている	38
⑤その他	7
質問3.について、そのように回答した理由（複数回答可能）	合計(人)
①授業の目的・目標を明確にしている	40
②声の大きさや話し方が適切である	58
③説明の仕方が適切である	59
④授業を進める速度が適切である	43
⑤配布資料・視聴覚資料・教材などが適切である	55
⑥板書が適切である	8
⑦その他	8
質問4.について、そのように回答した理由（複数回答可能）	合計(人)
①授業の予習・復習を促している	36
②学生が時間外学習を行うための課題を提示している	31
③学生の自主的学習に対する助言や支援をしている	35
④質問に対して丁寧に答えている	40
⑤課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている	12
⑥授業に参加型学習を取り入れている	20
⑦その他	14
質問5.について、そのように回答した理由（複数回答可能）	合計(人)
①授業を良くするための工夫や熱意が感じられる	80
②アンケートやレポートで得た意見を授業に反映させている	25
③学生に対して授業を良くするために「皆さんには～～して欲しい」といった努力を求める要求をしている	39
④その他	10

回答数が多かったものは順に、「授業内容が学問や社会の現代的課題に込んでいる」（89人）、「授業を良くするための工夫や熱意が感じられる」（80人）、「受講生の反応を見ながら授業を行っている」（66人）であった。一方で「板書が適切である」（8人）、「課題やレポート提出物に対してフィードバックをしている」（12人）を挙げたものは少なかった。学問がいかに社会とかかわっているのかに力を入れた授業が、受講生にも歓迎されているのかもしれない。また、よりよい授業のためには、板書の改善やフィードバック等、きめ細かい指導が教員に求められていると言えよう。

②授業改善アクションプラン

授業改善アクションプランでは、受講生の要望に応えるかたちで、分かりやすい資料を提供することや、話し方に気を付ける（ペース）等が提案された。

(2) 第15週目アンケート(3科目の合計)結果

①結果(問1から問6)

問1. この授業で教員は、受講生の学問的関心や知的好奇心を高めるように授業を進めていると思いますか	合計(人)	%	問2. この授業で教員は、受講生の知識・能力や興味・関心を確認しながら授業を行っていると思いますか	合計(人)	%
はい	58	43.0	はい	47	32.4
どちらかといえばはい	63	46.7	どちらかといえばはい	63	43.4
どちらともいえない	14	10.4	どちらともいえない	18	12.4
どちらかといえばいいえ	0	0.0	どちらかといえばいいえ	16	11.0
いいえ	0	0.0	いいえ	1	0.7
未回答	0	0.0	未回答	0	0
総数	135	100.0	総数	145	100.0
問3. この授業で教員は、受講生に分かりやすい授業をするように努めていると思いますか	合計(人)	%	問4. この授業で教員は、受講生の意欲的・自主的な学びを引き出すための工夫をしていると思いますか	合計(人)	%
はい	65	48.1	はい	43	31.9
どちらかといえばはい	58	43.0	どちらかといえばはい	58	43.0
どちらともいえない	12	8.9	どちらともいえない	27	20.0
どちらかといえばいいえ	0	0	どちらかといえばいいえ	6	4.4
いいえ	0	0	いいえ	1	0.7
未回答	0	0	未回答	0	0
総数	135	100.0	総数	135	100.0
問5. この授業で教員は、授業をより良くするための試みをしていると思いますか	合計(人)	%	問6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか	合計(人)	%
はい	53	39.3	はい	71	52.6
どちらかといえばはい	67	49.6	どちらかといえばはい	48	35.6
どちらともいえない	10	7.4	どちらともいえない	13	9.6
どちらかといえばいいえ	4	3.0	どちらかといえばいいえ	3	2.2
いいえ	1	0.7	いいえ	0	0
未回答	0	0	未回答	0	0
総数			総数	135	100.0

第15週目においても、全ての設問で「はい」「どちらかといえばはい」を合計した割合が最低でも70%を超えており、特に問2では90%を超えている。

問2は、第5週目と15週目を比較すると、8ポイント程度の上昇となっている。もちろん第5週目と第15週目では、アンケートに参加した受講生が全く同じとは限らないため、単純な比較はできない。しかし少なくとも受講生は、教員が、より充実した授業のために努力していることは評価しているのではないだろうか。

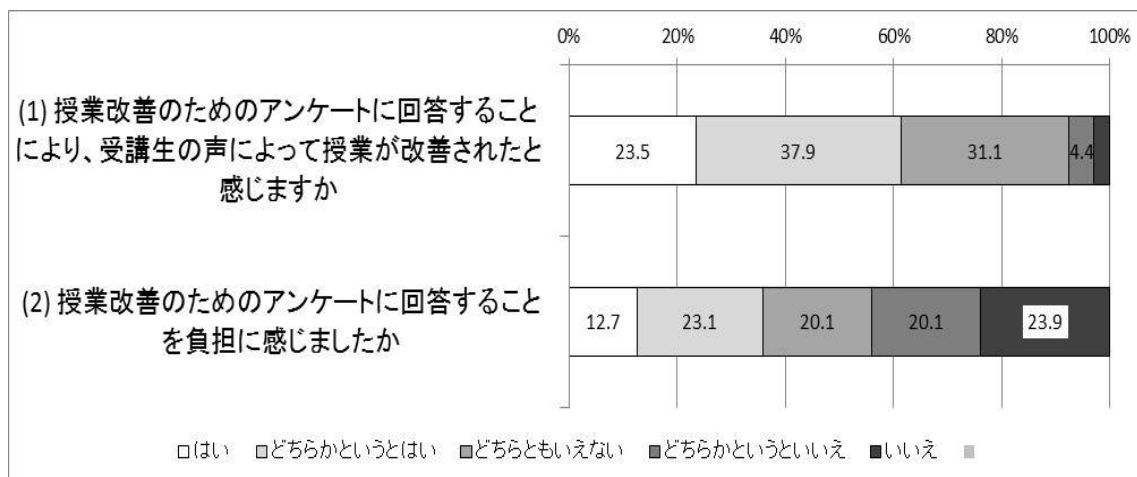
ただし課題としては、第5週目も第15週目も問4の「どちらともいえない」が他の質問と比べて高いことである(ともに20%程度)。教員は、より受講生の自主的な学びにつながる授業の取り組みが必要である。

②学生の諸能力の獲得（授業到達目標）

3科目で提示された主な目標は、それぞれ異なっていたものの、「専門領域における基本的な知識の習得」、「専門領域に関する現状と課題についての理解」、「専門領域と社会・経済とのかわりの理解」に大別できた。

これらについて、第15週目アンケートでは、80%程度の学生がその目標を達成できたと回答していた。

③アンケートの効果と負担



(注) (1) N=132, (2) N=134 (いずれも未回答を除く), 3%以下は表記せず。

受講生の約60%が、アンケートによって授業が改善されたと回答している一方で、受講生の約30%が、「どちらともいえない」と回答している。アンケートによる授業改善の取り組みを評価する受講生がいる一方で、否定はしないが評価もしないと受け止めている受講生もいることに留意すべきであろう。

また、このアンケートが負担になるかどうかについて、最も多かった回答は「いいえ」(23.9%)であったが、選択肢を見ると、回答は肯定にも否定にも偏ってはいない。「アンケートを歓迎する」という受講生ばかりではないことを押さえる必要があるだろう。

3. 今後に向けて

この結果を見る限り、受講生の多くは、教員がかれらの知的興味・関心を高める授業を行い、授業をよりよくする実践を行っていることをある程度評価していると言えよう。

ただだからといって、教員の努力は充分であるとは言えない。例えば自由回答では、講義の進め方、板書の文字（書き方）、声の大きさ、等、細かな要望が出されていた。

今後は、受講生の学習を助ける細かな配慮（フィードバック、分かりやすい資料の提供等）が必要とされるだろう。

またアンケートの負担については意見が分かれていたが、留学生も受講していることを考えると、日本語を母国語としない受講生にもわかりやすい質問文の検討も必要かもしれない。

6. 生命・医療分科会 カリキュラム編成活動報告

生命・医療分科会会長
野田 智洋（医学部）

1. 平成28年度カリキュラム編成の経過

各学部担当教員とメールによる連絡調整を行い、カリキュラム編成の基本方針を確認した上で、下記の通り編成作業を行った。

- ・ 2月15日(月)：例年より少し遅れて、学部、センター代表者あてに責任者の選任と、開設学期ならびに曜日時限の決定通知を行い、平成28年度授業計画策定の依頼を行った。
- ・ 2月24日(水)：すべての部局から授業計画が提出された。教育学部の担当が駒井先生と矢野先生に変更となった。
- ・ 2月24日(水)：代表者に授業計画一覧表を送り、シラバス登録を依頼した。
- ・ 4月14日(木)：授業を開始した。

開講曜日及び時間の決定に当たっては、時間割の移動を極力おさえ、混乱のないよう配慮した。従って、これまでの木曜日開講をベースとした時間割とした。さらにオムニバス形式にするか部局等が独自で開講するかについて検討したが、偏ることなく広い視野に立って授業を提供するという観点から、部局等のオムニバス形式とすることとした。

2. 平成28年度カリキュラムの変更・改善点

「健康」Aの代表者は教育学部の駒井先生に代わって矢野先生が、Cの代表者は同じく駒井先生が担当することになった。平成28年度も「アルコール学概論」が引き続き開講されたため、この分野の選択肢が増えている。学生による授業評価アンケートでも好評のようである。担当者に感謝したい。

3. 平成29年度への課題

「健康」は、A～Dの4科目をすべて1学期に開講しているが、今年度の受講者総数は593名となり、昨年度よりも74名減少した。近年減少傾向が続いており、大規模クラスの解消には好都合であった。一科目あたりの受講者数は平均148.25名（最大182名～最小89名）となっているが、100名前後の受講生で収まることが望ましいと考える。

授業内容については、担当部局の学問特性を生かしつつ、内容が偏ることなく編成したい。保健管理センターの北添先生が転出されるため、後任の井上先生が担当分を引き継ぐ予定である。また、岩崎先生が新たに「一般学生のための医療と医学の知識」を開講して下さった。

1. 平成28年度「健康」

(1) 授業評価アンケートー15項目における5段階評価の結果より

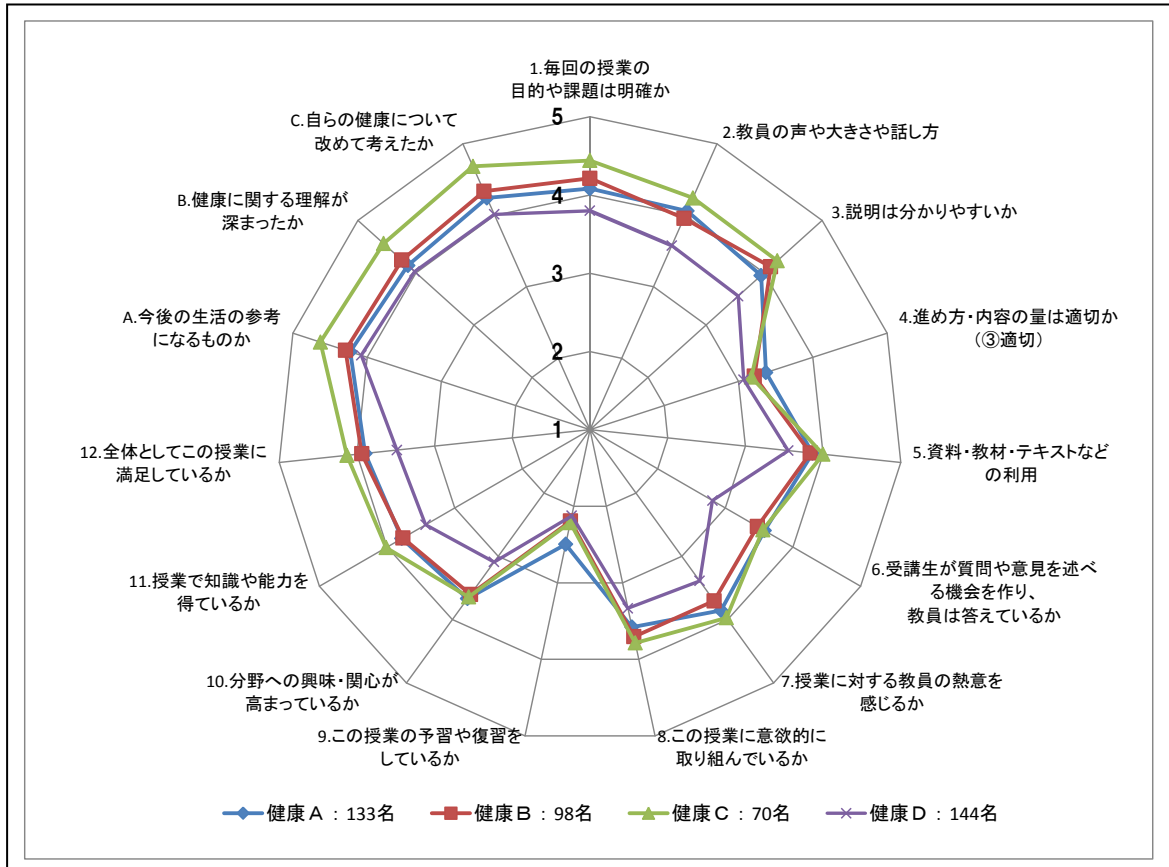


図1 平成28年度「健康」4クラスの授業アンケート結果

平成28年度1学期に行われた「健康」AからDクラスを対象として、学生による授業評価アンケートを実施した。4クラスの各質問項目(5段階評価)の平均値を図1に示す。

今年度は、回答者数(受講登録数, 対する回答率)は、A:133名(182名, 73.1%), B:98名(162名, 60.5%), C:70名(89名, 78.7%), D:144名(160名, 90.0%)であり、総回答数は445名(593名, 75.0%)となっている。4クラスの回答者の学年内訳は、1年生303名(68.1%), 2年生96名(21.6%), 3年生22名(4.9%), 4年生8名(1.8%), 無回答16名(3.6%)であった。

昨年度から各クラスの履修登録者は200名を超えていないが、最多のDクラスはCクラスに比べ約2倍となっており、受講者数のばらつきがある。図では、Dクラスの広がり但他クラスより小さくなっているが、こうした人数規模の相違が影響する面があると考えられる。授業分野ごとの質問にあたる3項目(問A,B,C)の評価平均は昨年度に引き続き4を超える結果であった。

また、過去5年間の経年的変化は図2の通りであり、この数年間は同様の傾向が示されているが、「自らの健康について改めて考えたか」以外は、昨年度の平均より下回るものであった。中でも「教員の声の大きさや話し方」「説明はわかりやすいか」「授業に対する教員の熱意を感じるか」「この授業に意欲的に取り組んでいるか」「分野への興味・関心が高まっているか」「全体として授業に満足しているか」「今後の生活の参考になるものか」「健康に対する理解が深まったか」の8項目は最低値を示す結果となった。

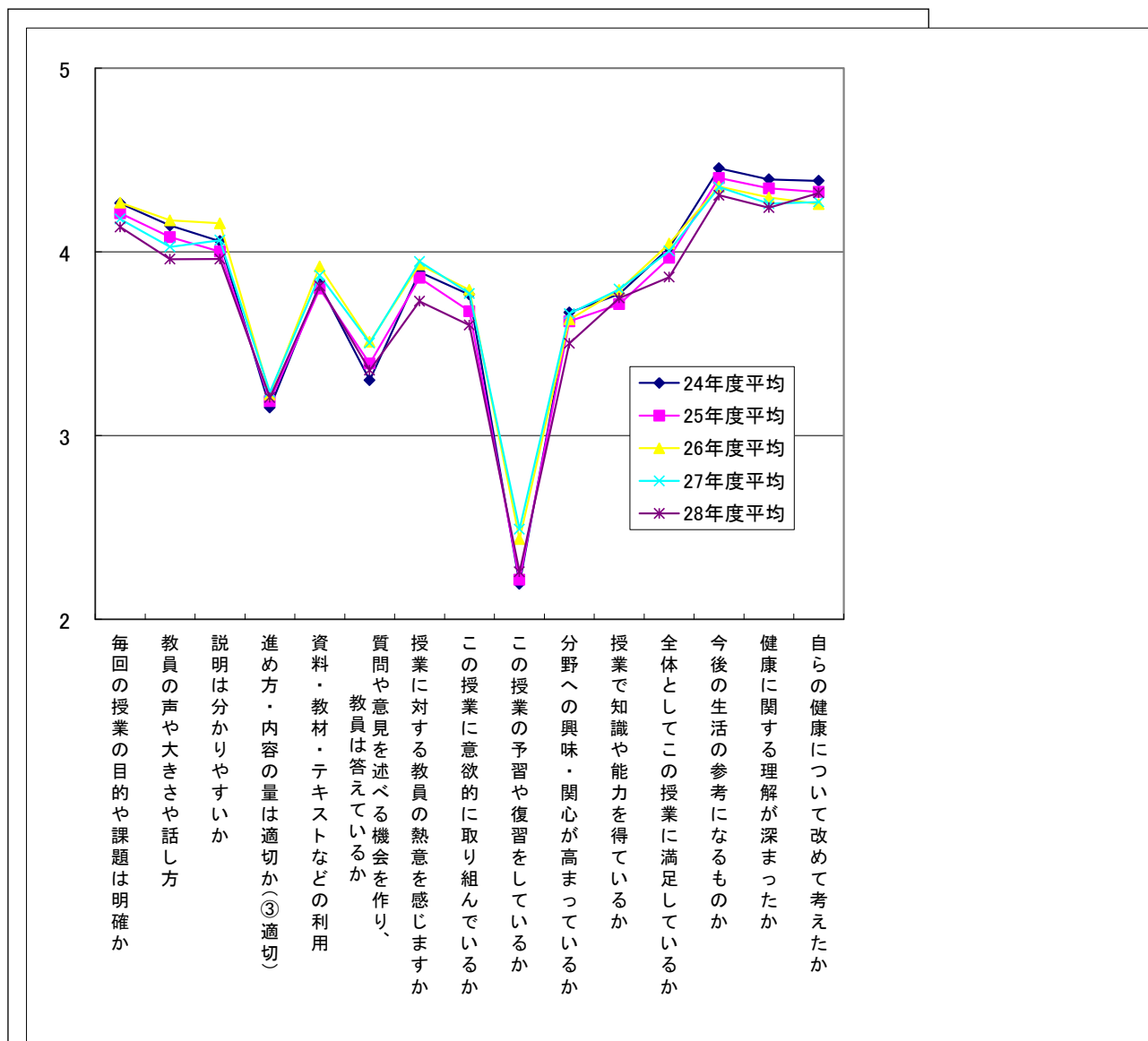


図2 「健康」4クラスの授業アンケート平均値の変化ー過去5年間ー

(2) 授業評価アンケートー自由記載欄より

平成28年度は、総回答445名のうち、79名(17.8%)の自由記載欄の回答を得た。その記述データを類似内容ごとに整理し、得た要素と回答人数を、表1ならびに表2に示す。学生の前向きな記述として得られたポジティブデータについては、「健康への意識・関心が高まった」、そして自分自身の健康を振り返る機会となったとの回答が多く、昨年度と同様であった。要望

や批判を含めネガティブな意見のデータについては、昨年度は寄せられていなかったスライド・マイクの不調などの「設備・環境面」についての意見が記されていた。これについては記載人数にかかわらず、事実として不調があったことを示しており、改善が必要な事項と考える。

表 1 ポジティブな内容を示すデータについて

内容	人数
【講義内容について】	
・健康への意識・関心が高まった (→うち、自分自身の健康について振り返る回答)	40 (36)
・健康について、よく学べた	14
【講義方法・展開等について】	
・わかりやすい、楽しく学べた (→うち、パワーポイントの資料・具体的な提示があることで)	9 (3)
(→うち、印刷資料があることで)	(1)
・オムニバス形式であることで幅広く学べた	3
・書き込み形式の資料によって学びやすかった	1
・授業の最後に感想、レポートを書くシステムはよかった	1

表 2 ネガティブな内容を示すデータについて

内容	人数
【設備・環境面について】	
・スライドの調子が悪いことが多い	2
・マイクの調子が悪いことが多い	2
・マイクを使わないで話されると聞き取りづらい	1
【講義の進行・展開について】	
・スライドの展開が遅すぎる	5
・担当者が毎回違うとわかりづらい	2
【テスト・評価について】	
・最後の小テストについては事前に知らせてほしい	1
【その他】	
・昼からの講義で眠かった	1
・バスが8:40到着なので、配慮がほしい	1

「講義の進行・展開について」スライドのスピードが速いとの意見が毎年寄せられている。「健康」4クラスいずれも受講学年は1年生が多く、大学の授業展開や大人数クラスに慣れていない点も影響していると思われる。学生側が展開についていけない結果、意欲をもてず満足が得られなければ、クラスの雰囲気にも影響し、講義展開を困難にさせる悪循環になることも危惧される場所である。オムニバス形式で限られた時間内に必要な内容を教授するには、各教員が非常に苦慮する場所である。健康についての学識に触れることの楽しさと意欲を刺激できるように組み立てて、毎回の講義をしているところがアンケートの結果に反映されていると分析されるが、同時に、受講生の半数位以上が初めての講義展開を経験することについて等、工夫の余地があることが示された結果でもあったと考える。

最後に、平成 28 年度の授業評価アンケート自由記載欄での目立った意見を一部抜粋して、以下に示す。

- オムニバス形式の講義の利点を最大限に生かし、様々な角度から健康について考えることができました。
- 日頃良いとされる習慣がなぜ良いのか理由がはっきり分かりました。とてもためになると考えます。
- 日々の生活に直結して役立つ情報を提供してくれるので、自分にとってとても意味のある授業であったと感じている。
- 講義が毎回違う先生になるので、先生によって分かりやすい(づらい)、聞きとりやすい(にくい)がバラバラでした。でも健康に関しての意識は高まりました。

平成 28 年度 FD の生命・医療分科会 FD 活動は、年度当初の計画に則り実施した。以下にその一部を示す。

平成27年度より、学生の予習復習の促進、また教員等が印刷・配付にかかる時間を省くことによる講義の質向上を主な目的として、講義資料の電子化を試みている。本年度も引き続き朝倉キャンパスにおいて1学期に開講された「健康 A」および「健康 B」の一部の授業において、講義資料を PDF 化して KULAS 上にアップロードすることとし、学生に利用を促した。ダウンロードの状況等について集約するとともに昨年度と比較することで、学生の学習への利用状況や今後の在り方について部会員と検討した。

	平成28年度資料閲覧状況	27年度閲覧状況
健康 A(182 名登録)	第 5 回目 40 名 (155 名出席:25.8%)	<u>18.0%</u>
	第 6 回目 24 名 (131 名出席:18.3%)	<u>15.8%</u>
	第 7 回目 27 名 (149 名出席:18.1%)	<u>17.4%</u>
	第 8 回目 25 名 (141 名出席:17.7%)	<u>10.5%</u>
健康 B(162 名登録)	第 12 回目 37 名 (137 名出席:27.6%)	<u>14.6%</u>
	第 13 回目 22 名 (135 名出席:16.3%)	<u>9.6%</u>
	第 14 回目 24 名 (142 名出席:18.0%)	<u>9.9%</u>
	第 15 回目 29 名 (142 名出席:22.3%)	未集計

健康 A・B とともに、閲覧率は向上していた。直接的な理由は明らかではないが、履修カルテなどの学務情報を KULAS に入力する機会は年々増えており、KULAS の利用頻度の影響を受けた可能性が指摘された。

昨年度と同様に、講義回数を重ねることと閲覧率との間に関連性はなく、学習意欲の高いと思われる20%弱の固定学生のみが継続的に閲覧をしている可能性が指摘された。

Moodle の利用をしてはどうか、との指摘があった。

7. 自然分野分科会

自然分野分科会会長 三宅 尚（理学部）

1. 自然分野分科会の運営体制

本年度の自然分野の教育目標は、昨年度と同様に、「自然科学に関する基礎的な知識，方法および思考法を習得し，それらを基盤とした自発的な探求力，深い洞察力および論理的な思考力を育成する」ことである。これを実現するために，FDや自己点検評価活動とも連動して，カリキュラム等編成に関する課題を点検し，編成作業を進めてきた。なお，カリキュラム等編成に関する分科会委員への情報周知や協議・作業依頼に関しては，原則としてメール会議で実施した。

本年度の自然分野分科会は次に示す12名の委員で構成される。FD担当の分科会副会長には理学部の藤代 史委員が，自己点検評価担当の分科会副会長には教育学部の加納理成委員が選出された。

【自然分野分科会委員】

分科会会長：三宅，分科会副会長（FD 担当）：藤代，分科会副会長（自己点検評価担当）：加納
その他の委員：原田哲夫（教育学部），三角 淳・松本健司・川畑 博・鈴木一弘（理学部），
関 安孝（医学部），今城雅之・島村智子・津田正史（農林海洋科学部）

2. 平成 29 年度カリキュラム等編成

本年度のカリキュラム等編成に際しては，1) 教員減にともなう共通教育の基本人数・コマ数の削減，2) 共通専門・基礎科目の学部専門基礎科目への移行，3) 農学部の改組，4) 機構・センター所属教員への授業担当依頼などに伴う大幅な変更が加えられた。第1回カリキュラム等編成部会（7月1日開催）において，平成29年度のカリキュラム等編成にあたっては，本年度より人事が原則凍結され，ポイント制が停止していること，昨年度から本年度への共通教育の授業担当体制の変更が学生の履修に及ぼした影響などを把握できない状況にある（年度途中のため）ことなどを理由に，本年度と同様の基本人数・コマ数で実施すること，担当教員の退職などで部局ごと，分野ごとに割り当てられた基本人数・コマ数を達成することが困難な場合には，その「変更希望理由書」を提出し部局・分野間でそれらの調整を行うことなどが了承された。結論として，平成29年度の自然分野の担当コマ数は，本年度と同様，教育学部が7，理学部が44，農学部が13である。この担当体制に基づき平成29年度のカリキュラム等編成作業を開始した。

本年度からの主な変更点は以下の通りである。

【新規開講】

教養科目：化学専攻一年生の有機化学概論（2学期・木4）

専門基礎科目（H27以前入学生向けの共通専門・基礎科目）：微分積分学基礎（1学期・火3），

化学概論（1学期・火1），化学概論（2学期・火3），情報科学概論II（2学期・水1）

【題目変更】

教養科目：

「数学をとおしてみた生物」→「花粉を科学する」

「流れと波の災害」→「気象と波の災害」

専門基礎科目（H27 以前入学生向けの共通専門・基礎科目）：

- 「微分積分学概論 AI」 → 「微分積分学概論」
- 「微分積分学概論 AII」 → 「一変数の微分積分」
- 「微分積分学概論 BI」 → 「微分積分学基礎」
- 「微分積分学概論 BII」 → 「理工系微分積分学」
- 「微分積分学概論」 → 「微分積分学通論」
- 「線形代数学概論 A」 → 「線形代数学概論」
- 「線形代数学概論 B（2 科目）」 → 「理工系線形代数学（2 科目）」
- 「論理と集合」 → 「理工系数学（論理と集合）」
- 「物理学概論 I」 → 「力学 I」
- 「物理学概論 I」 → 「物理学概論」
- 「物理学概論 II」 → 「物理学概論」
- 「化学概論 I」 → 「化学概論」
- 「生物学概論 I（2 科目）」 → 「生物学概論（2 科目）」
- 「生物学概論 II（2 科目）」 → 「生物学概論（2 科目）」
- 「地球科学概論 I」 → 「地球科学概論」
- 「地球科学概論 II」 → 「地球科学概論」
- 「情報科学概論 I」 → 「情報科学概論」
- 「基礎化学実験（2 科目）」 → 「基礎化学実験 I・II（2 科目）」

【未開講】

教養科目：数理の世界

【廃止】

専門基礎科目（H27 以前入学生向けの共通専門・基礎科目）：線形代数学概論 B（2 学期・月 4）、化学概論 I（2 学期・火 2）、化学概論 II（2 学期・木 2）、生物学概論 I（2 学期・火 1）、地球科学概論 II（2 学期・火 1）、基礎生物学実験（2 学期・集中）

【科目区分変更】

専門基礎科目（理学部） → 教養科目：海洋生物学基礎実習

【その他】

特になし

3. 「第 64 回中国・四国地区大学教育研究会」参加報告

日程：2015年6月11日（土）・12日（日） 開催場所：岡山大学

自然分野分科会からは分科会会長が、共通教育主管と他の分科会に所属する委員らとともに出席した。分科会会長は、11日のシンポジウムと12日の自然分野分科会に参加した。

【シンポジウム】

「学習成果の質を重視する教育システム」，「アクティブ・ラーニングで出来ること，出来ないこと ～事例紹介と私的考察～」と題した2件の話題提供がなされ，その後，「学士力向上のための教育システム・授業改善」と題したパネルディスカッションが行われた。

【基礎教育分科会】

内容：学士力向上を目指した自然科学系授業での改善の取り組みに関する発表と意見交換

司会者による本分科会会合の趣旨説明の後、「岡山理科大学における理系教養科目の充実およびリメディアル教育の改革」，「力学概念調査によるアクティブラーニングの評価」，「半強制的な反復学習による基礎科目の徹底教育」，「ワークシート」活用により学生の学習意欲を高める試み」と題した3件の話題提供がなされ，その後，特にリメディアル教育の役割，アクティブ・ラーニング手法の評価，基礎教育の効果的な学習法などに関して，参加者による討論が行われた。

4. 今後の課題

平成 29 年度の自然分野の担当コマ数は，本年度と同様であったため，農林海洋科学部の改組後の学年進行と理学部から理工学部への改組が重なったものの，特に混乱なく担当体制を決定することができた。次年度以降の共通教育の基本人数・コマ数の見直しに関しては不明であるが，各部局とも今後の担当コマ数の変動に備え，自然分野科目の担当体制に関して十分な協議をしておく必要があると考える。

1. 調査の概要

平成 28 年度の授業において実施された 5 週目アンケート・15 週目アンケートの集計結果について、検証を行った。

2. 調査対象

平成 28 年度共通教育自然分野の開講科目 受講生

該当科目の中で、5・15 週目アンケートを実施したものは5科目である。

3. 分析結果

昨年度と同様、アンケートの回答の選択肢の「はい、どちらかといえばはい、どちらともいえない、どちらかといえばいいえ、いいえ」をそれぞれ「5 点, 4 点, 3 点, 2 点, 1 点」として、「全授業共通質問項目」の 6 つの設問に対して、5 週目と 15 週目の結果を比較してみると以下のものであった。

設問	実施週	5 点	4 点	3 点	2 点	1 点	有効 回答数	平均点
1. この授業で教員は、 受講生の学問的関心や知的 好奇心を高めるように 授業を進めていると思 いますか	5 週目	41	61	25	15	3	145	3.84
	15 週 目	41	61	30	13	6	151	3.78
2. この授業で教員は、 受講生の知識・能力や興 味・関心を確認しながら 授業を行っていると思 いますか	5 週目	28	62	26	23	6	145	3.57
	15 週 目	36	56	37	17	5	151	3.67
3. この授業で教員は、 受講生に分かりやすい授 業をするように努めてい ると思えますか	5 週目	36	66	23	16	4	145	3.79
	15 週 目	47	51	28	16	9	151	3.74
4. この授業で教員は、 受講生の意欲的・自主的 な学びを引き出すための 工夫をしていると思いま すか	5 週目	20	46	51	21	7	145	3.35
	15 週 目	29	44	45	22	11	151	3.38
5. この授業で教員は、 授業をより良くするため	5 週目	31	59	39	12	4	145	3.7

の試みをしていると思いますか	15週目	32	59	35	18	7	151	3.6
6. この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか	5週目	41	59	26	15	1	142	3.87
	15週目	42	49	31	20	7	149	3.66

アンケート結果は各々の授業ごとにばらつきもあるが、全体的な特徴として、本年度では設問1, 3, 5, 6にて平均点が低下していることである。

設問1では5点, 4点と回答した学生の数が変わっておらず, 3点, 1点の回答数が増加している。単に有効回答数の増加がこれに影響したと考えられる。これは設問5も同様であると考えられる。

設問3における5点, 4点の回答数は102ポイントから, 98ポイントと減少している。したがって, この項目に関しては改善のための方策を考える必要があるかもしてない。もっとも, 5点の回答数のみに絞れば11ポイントも増加しているため, 授業内容の進行によって難易度が上がり相対的に厳しい判断になってしまったのではないかと考えている。設問6もこれと同様ではないかと考えている。

以上をまとめると, 自然分野科目に対する受講生の反応として, 5週目の時点である程度満足している層はそのまま15週まで維持しているのに対し, 5週目での中間層が15週では少し上下に分離するような傾向が見られた。授業ごとの性質もあるが, この層のフォローを意識して授業を展開していく必要があるかもしれない。また, 細かな分析は行っていないが, 自由記述の回答数が5週目から15週目にかけて大きく増加していた。授業の進行に伴い, 受講生の授業内容に対する積極性が増加し, 厳しい回答が増えたのではないかと考えられる。

また, 15週目アンケートにおける「授業改善アンケートの効果と負担」に関する設問の結果は以下のようであった。

設問	5点	4点	3点	2点	1点	有効回答数	平均点
1. 授業改善のためのアンケートに回答することにより, 受講生の声によって授業が改善されたと感じますか	13	32	48	21	10	124	3.14
2. 授業改善のためのアンケートに回答することを負担に感じましたか	8	16	43	26	33	126	2.52

アンケートの実施による授業改善については, 一定の効果을あげていると考えられる。昨年度も挙げたように, 受講生によってはアンケートに関係なく最初からそれなりに授業に満足している場合や, 授業内容自体に不満がある訳ではないが自身の要望が直接反映された訳でもないと感じている場合などもあるかも知れない。

平成 28 年度は自然分野分科会として独自の FD 講演会などは開催しなかった。本年度は、FD 部会主催の FD に対するニーズの調査依頼があり、自然分野分科会として意見集約し、FD 部会に以下のような提案した。

1. アクションプラン作成について

全 15 回の授業の途中で学生の意見を柔軟に授業に反映させて軌道修正を行う場合、「アクションプラン作成」ではどの程度までのプラン変更が想定されているのかわからない。例えば、シラバスの授業計画そのものや各回の授業概要までも変える大規模なものは時間的に難しく、また、そもそもシラバスが KULAS で修正できないなどの壁があります。「アクションプラン作成」で想定されている軌道修正の具体例などがあれば今後の参考になると思います。

2. アクティブラーニングを授業に取り入れていくために

最近、ニコニコ生放送でスタートした N 予備校という授業番組があります。ネットを利用したリアルタイムなアクティブラーニングが展開されていて楽しく視聴しています。視聴者がリアルタイムに書き込んだコメントを教師が拾ってアドリブで回答したり、視聴者がカメラで撮ったノートの回答写真が教師の電子黒板上に映されて、その場で添削したり、4 択問題を出題してスマホや PC で参加したりと、楽しそうです。この授業番組は電子黒板やネット授業などのための設備が整ったスタジオで開講されています。本学でも 1 教室でいいので、本格的なアクティブラーニングスタジオを作れないでしょうか。そういう最新のスタジオの使い方の FD なら是非参加してみたいです。また、アクティブラーニングでグループ学習をするには、本学の教室の椅子と机は向いていないと思います。ほとんどの教室は長机と椅子が固定されており、学生は左右の学生としか話できません。共通教育棟の 310 室、324 室、136 室のように机と椅子が移動できるようにすべての教室を順次、改善したほうが良いと思っています。一般的なアクティブラーニングのお話は、本やマニュアルなどを読んで自分の授業に少しずつ反映できるため、そういった“教員のバージョンアップ”を目的とした内容の FD にはあまり興味が湧きません。アクティブラーニングに限らず、教育全般で横断的に、本学では何が足りないかや、現システムの使いにくい点などを洗い出すような、“本学の環境のバージョンアップ”の FD には興味があります。

これらの意見を FD 部会で報告した結果、本年度の FD 部会主催の FD (12/7, 2/22 開催) では、ある程度意見が反映された形で開催されており、FD 部会と分科会とが連携した FD が実施されたと思われる。

8. 外国語分科会

外国語分科会長 齋藤昌人(人文社会科学部)

1. カリキュラム編成

基礎科目（基礎教育外国語）の廃止にともなう影響は、外国語分野では 2017 年度から出てくる。新カリキュラムと旧カリキュラムの両方を走らせ、さらに学部専門科目に引き取った旧基礎科目を新たな形態で開講するという状況のもと、各授業の質、学生への単位保証、さらには教員の負担という三つの問題点のバランスをとり、どこに着地点をもとめるかというのが、カリキュラム編成上の大きなポイントであった。旧カリキュラムの学生数等も考慮し、2017 年度の開講科目数を一応は出したが、実際の受講状況については不確定要素も多分にあるので、この点は来年度に向けてさらに検討が必要であろう。

2. 自己点検評価活動

今年度は、一部教員間での相互授業参観にとどまった。

3. FD 活動

今年度は、3 件の FD に関わる活動を実施した。うち一件は、外部講師を招いての講演と意見交換会、二件は教員による他大学等での状況調査・意見収集である。ここでは、そのうちの二件について簡単に報告する。残りの一件は 3 月中旬に予定されているので、概略のみを記しておく。

①外部講師を招いての講演と意見交換会

実施日：2017 年 3 月 3 日 14 時から 16 時

場所：人文社会科学部棟第 3 会議室

講師：熊谷哲哉氏（近畿大学経営学部講師）

参加者：10 名（高知大専任教員 7 名、非常勤講師・他大学教員 3 名）

講演タイトル：「外国語教育における iPad のアプリを利用したアクティブラーニング型授業の実践例 - ドイツ語の自由作文作成法を中心に」

講演の概要：

最初の一時間は講師の熊谷氏による講演。内容は次の通り。まず、熊谷氏が関係する複数の大学における外国語のカリキュラムや履修状況が紹介された。その後、外国語の授業、とりわけドイツ語の自由作文をどのように教えるかという課題について、iPad やスマートフォンのアプリの利用やアクティブ・ラーニング的な方法を用い、いくつかの大学で試みた事例が紹介された。同時に、新たな方法や新型の機材の導入だけにとどまらない教授法は、いかにして可能なのかという問題についても、これまでの熊谷氏の実践から得られた見解が示された。

講演後、引き続き質疑応答・意見交換に移った。そこでは、学生を授業に巻き込む仕掛けや、その手間について、参加者は少ないながらも活発な意見交換がなされた。

②教員による他大学等での状況調査・意見収集

実施日：2017 年 3 月 3 日

場所：金沢大学外国語教育センター

派遣教員：高橋俊先生（人文社会科学部）

内容：

上記外国語教育センターの杉村安幾子准教授（中国語）と大学教育における外国語教育、とりわけ初修外国語に関する現状と問題点について意見交換を行う。具体的な内容は以下の通りである。

金沢大学では次年度からクォーター制を導入するということで、初修外国語教育をクォーター制にどのように合わせるかについて説明を受けた。金沢大学では、特に外国語に関しては、実質的には半期 15 回の授業として対応するということであった。また、これまでは「外国語 2 科目必修」だったのが、英語を必須とする学部が増え、さらに初修外国語を課さない学部もでるなど、初修外国語教育の状況が徐々に悪化しつつある、ということが説明された。

③教員による他大学等での状況調査・意見収集

実施日：2017 年 3 月 11 日

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス

派遣教員：土屋京子先生（人文社会学部）

内容：公開シンポジウム「初中等教育における外国語教育の役割」に参加

10. スポーツ・健康分科会

スポーツ・健康分科会長 幸 篤武(教育学部)

ーカリキュラム編成一

1. カリキュラム編成の経過

- 10月4日 平成29年度共通教育科目カリキュラム(授業題目表)作成の開始
- 10月24日 平成29年度スポーツ・健康科目について、時間割・担当者の検討
- 11月25日 平成29年度共通教育科目カリキュラム(授業題目表)の提出

2. カリキュラム編成の確認・変更点及び改善点

(1) 平成28年度を振り返って

スポーツ科学実技について、受講者総数は355名(27年度329名)であり、昨年度よりも26名の増加であった。このうちバドミントンでは朝倉で開講された3コマのいずれも35名以上の受講生を集めた。またテニスや卓球についても20名を超える受講があり、生涯スポーツとして取り組みやすいラケットスポーツのニーズが堅調であった。

スポーツ科学講義について、ABCの3科目を開講し、合計561名の受講があった。昨年度は4科目開講559名であり、科目数減少の影響はなかったと思われる。一方で、28年度ではAが201名、Bが72名、Cが288名の分布になっており、科目間で大きな偏りがみられた。このうちAとBは同時開講であり、シラバスに記載される講義内容の違いが影響した可能性があった。

実技の受講者数は伸び続けているが、単位数が多く、受講人数制限の制約を受けにくい講義科目の受講者数には及ばなかった。

(2) 29年度に向けて

実技では、ゴルフの開講について、担当教員の退職のため見送ることとした。ゴルフは2コマの開講であるが、ここ数年は受講者数が1桁にとどまるなど課題とされてきた背景があり、開講見送りが受講生の不利益になることはほとんどないと思われる。なお理工学部改組により教員免許状取得要件が29年度より変更されることとなったが、29年度は28年度と同等の開講として学生の動向を検証し、30年度以降さらなる対応が必要か検討する。

講義では科目数の増加は難しく、28年度と同様の開講とした。先述の教員免許状取得要件の変更による影響を検証し、30年度以降に科目数や時間割の検討を行う。

1. スポーツ科学講義

平成 28 年度は，岡豊キャンパスで行われた講義において，1，2 学期ともに通常の学期末授業評価アンケートを実施した。しかし，これについては，実施対象者が特定されるため報告書への記載は見送ることとする。また，朝倉キャンパスで行われたスポーツ科学講義 A から D では，C のみで授業評価アンケートを実施したが，受講学生数のばらつきが大きいので詳細な分析は見送ることとした。

2. スポーツ科学実技

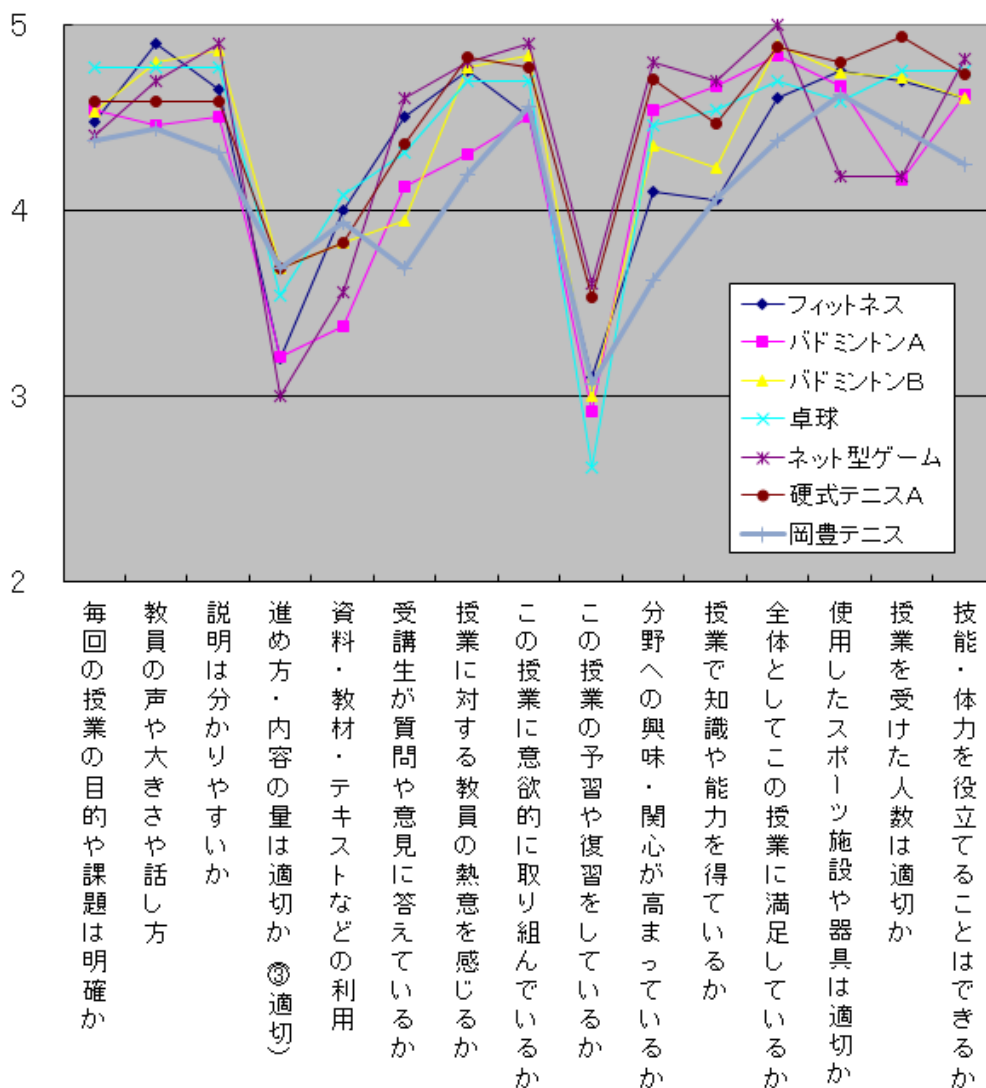


図1 平成28年度1学期授業評価アンケート集計結果

今年度は，すべての授業で授業評価アンケートを実施した。1学期の種目は，フィットネス，バドミントンA，B，卓球，ネット型ゲーム，硬式テニス，ならびに岡豊キャンパス開講の硬式テニスである。

対象となった7科目の学生満足度（設問13）「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」の評価は岡豊の硬式テニスが4.38とやや低いものの、ネット型ゲームが5.00、フィットネスが4.60、バドミントンAが4.83、Bが4.89、卓球が4.69、硬式テニスが4.88であり、総じて高く評価されている。しかし、図1のように、（設問6）配付資料や視聴覚教材の利用が適切かどうか、（設問10）この授業の予復習をしているかどうか、に関しては低い評価がなされている。これら2問については、いずれの種目でもほぼ同様の傾向が認められ、授業方法に問題があるというよりは、スポーツ実技という科目特性に附帯する要因であると考えられる。全体の傾向としては、例年と同様である。

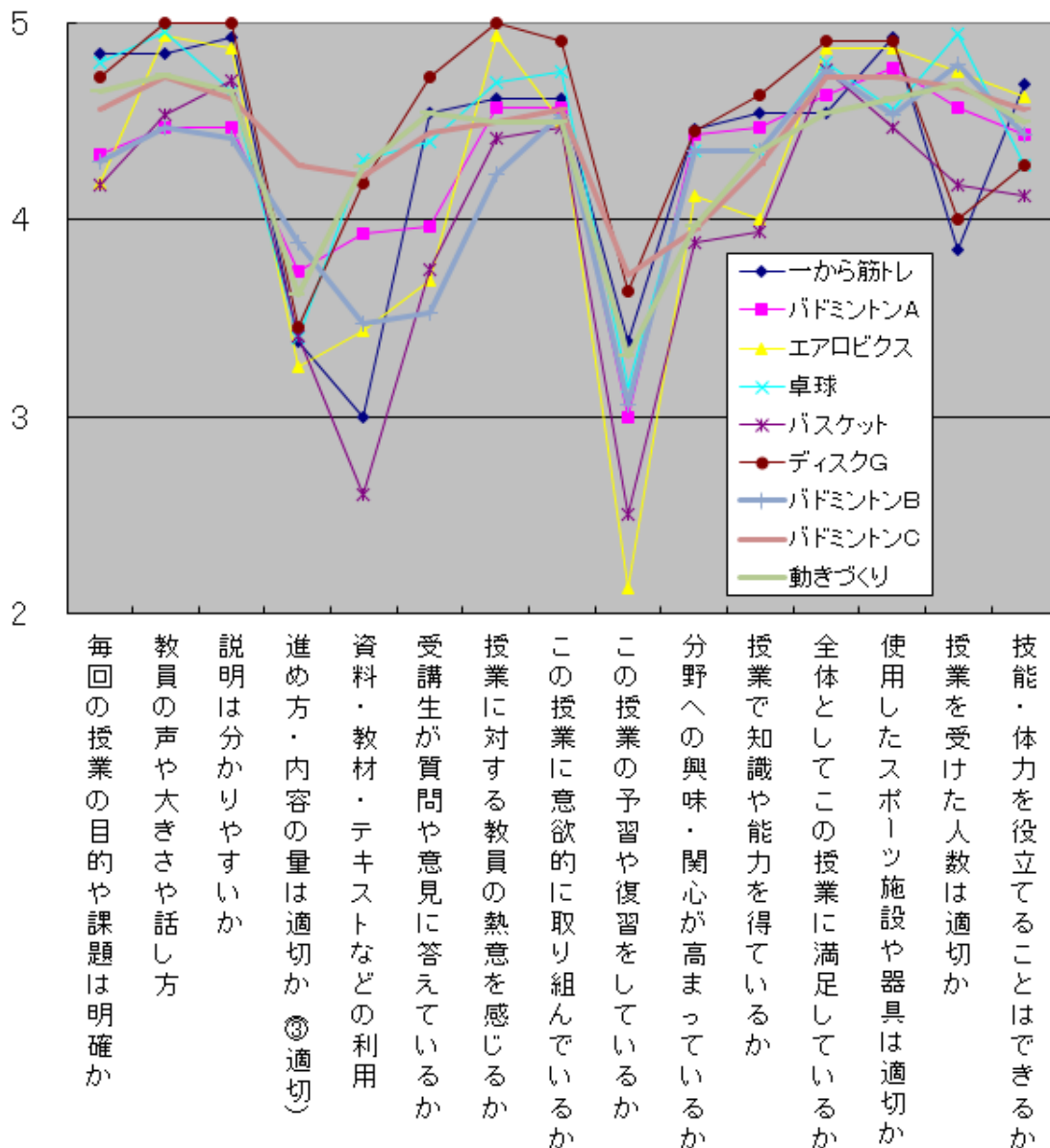


図2 平成28年度2学期授業評価アンケート集計結果

2学期の種目は、一から学べる筋力トレーニング、バドミントンA、エアロビクス、卓球、バスケットボール、ディスクゲーム、バドミントンB、ならびに岡豊キャンパス開講のバドミントンCと動きづくり。対象となった9科目の学生満足度（設問13）「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」の評価は1学期の平均4.75には及ばなかったものの、4.73の高い値となっている。

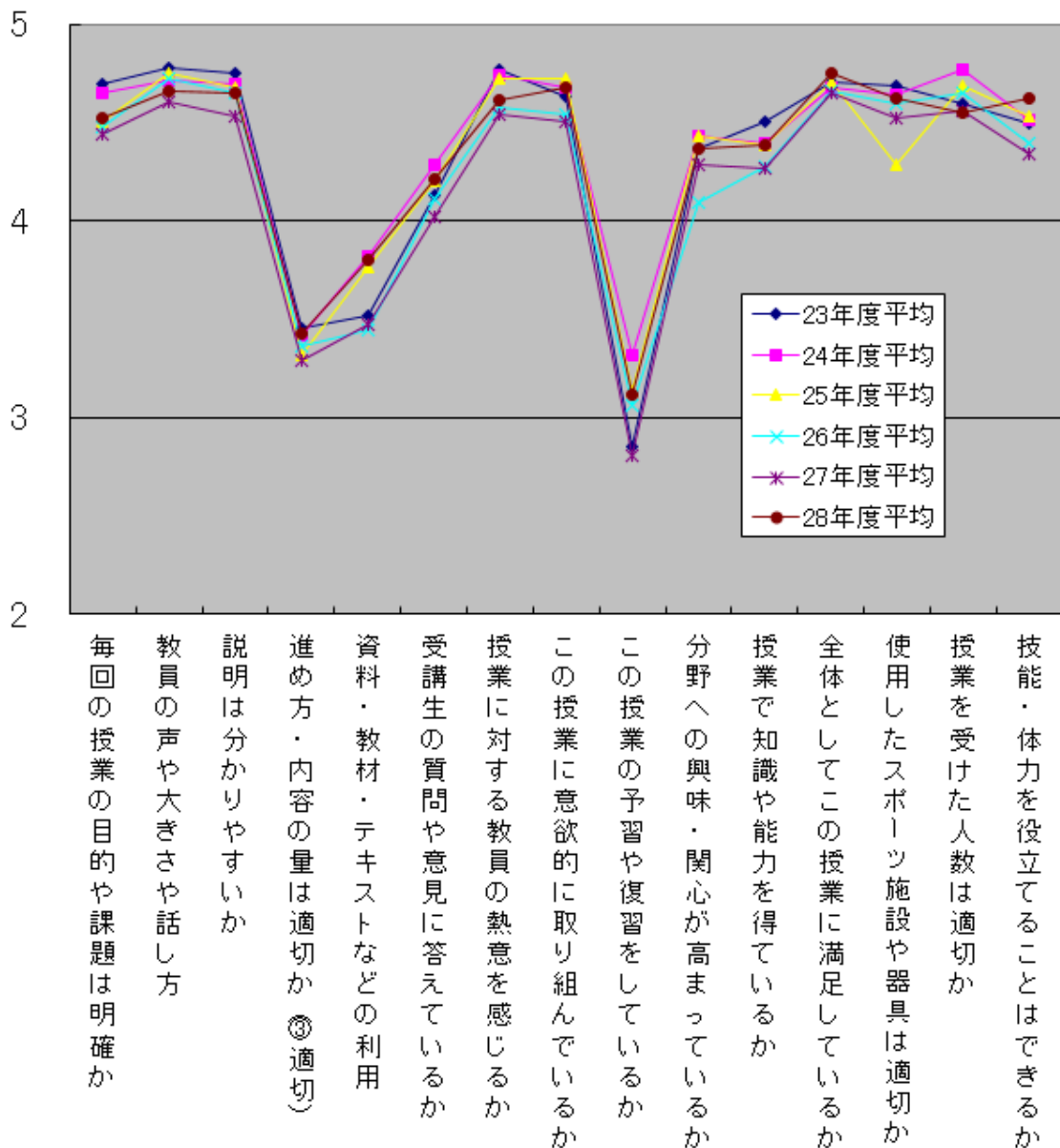


図3 平成23年度から28年度の学期末授業評価アンケート集計結果

図3は、23～28年度1学期7種目の授業評価アンケート平均値を比較したものである。図のように過去6年間の傾向は大きく変わっていない。設問10の予復習に関する質問項目に対する評価が低い。図1の分析と同様、実技という科目特性によるものと考えられる。23年度は「授業で知識や能力を得ているか」との質問に対する回答が4.51と過去最高を記録した。その後、年度を追う毎に低下していたが28年度にようやく4.39までに回復した。さらに「この分野への興味・関心が高まっているか」の項目で平成26年度は従来から大きくポイントが下がっていたが、27年度はやや持ち直し、28年度に改善した。

現在のところ、授業に対する教員の熱意、学生の意欲ともに高い評価を維持しながら推移しており、特別な支援や対策を講じる必要はないと考えられる。今年度の朝倉キャンパス受講者総数は326名である。昨年度から新たな科目を設けたり、開講学期を変更するなどの工夫により増加傾向を維持している。来年度から理工学部の学生は教員免許を取得する場合、実技2単位が必修となるため、受講学生数はさらに増加するものと思われる。

スポーツ・健康部会では、スポーツ科学実技に関して昨年度までと同様、次のような独自の設問を設定した。

① 「授業でを使用したスポーツ施設や用具は適切ですか」

学習意欲を喚起するためには重要な要素である。朝倉キャンパステニスコートが改修されたため、4.80に改善しているのに比べ岡豊テニスでは4.38となっている。アンケートの自由記載欄に「夏の暑い時期に一時間半も外で運動すると疲れるし、頭が痛くなることがあるので、授業時間を短縮するか、休憩時間を作ってほしいと思った。テニスコートに日陰を作ってほしい」との記載があった。ネット型ゲームで4.18と、やや低い数値があったが、平均は4.66であり全体の傾向は変わらない（27年度：4.75、26年度：4.60、25年度：4.29、24年度4.64、23年度：4.69）。

② 「一緒に授業を受けた人数は適切ですか」

授業の成果を上げるためには適正人数がある。多すぎると練習の回数や機会が制限され、技術の向上にとってはマイナスの要因にもなる。平均すると数字の上では今年度も4.52と高い評価を得ている（27年度：4.56、26年度：4.65、25年度：4.69、24年度：4.77、23年度：4.60）。

③ 「獲得した知識や技能、体力を今後の生活に役立てることができますか」

これについては4.53と、昨年4.35から改善したが、生涯にわたっての運動実践や体力づくりの必要性を理解させるように更に努力したい（27年度：4.35、26年度：4.39、25年度：4.53、24年度：4.51、23年度：4.50）。

自由記述欄での個別意見も、おおむね上記の好評価が反映されている。目立った意見を以下に、例示しておく。

- この授業を受けている皆とふれ合うことができ良かったです。おかげで楽しく授業を受けることができました。（フィットネス）
- レクリエーションのバリエーションが豊富で、将来教師を目指しているのでこの授業で色々なものを子どもたちにも伝えてあげたい。そしてオリジナルのプログラムもつくっていきたいと思う。とても楽しい時間でした。ありがとうございました。（フィットネス）
- 普段はあまり運動をしていないので、自分の体力はどうなるかを心配しています。しかし、ジョギングをしていたら、意外と楽かったです。筋肉痛もしませんでした。フィットネスの授業のおかげで体力がアップしたと思います。（フィットネス）
- 思っていたよりも自由な授業でした。4回生まで、色々な学部の人が幅広くいるので、全く関わりのなかった先輩方とも話すことができ良かったです。（バドミントン）
- この授業にいつもたのしみにしています。からだによく元気になりそう。ありがとうございました！（バドミントン）
- バドミントンのルールを知り楽しく競技をすることができました。ありがとうございました。（バドミントン）
- 他の学部の方や先輩方との交流もできてとっても良かったです。運動をして汗をかくことはやっぱり良いと思います。（バドミントン）
- 先生がバドミントンを通して楽しそうに私たちに接してくださったので、私たちも楽しく活動することが出来ました。（バドミントン）
- 毎回、準備運動が念入りで、ケガをせずに授業を終えることができ良かったです。丁寧に指導していただいて、ありがとうございました。（バドミントン）

- 卓球って楽しいじゃん。(卓球)
- 卓球サイコー。(卓球)
- 卓球好きになりました！ありがとうございます。(卓球)
- 楽しかった!!このメンバーで(少ないけど・・・)良かったと心から思う。(ネット型ゲーム)
- 非常に楽しかったです。来年以降もぜひやってほしいと思いました。(ネット型ゲーム)
- 今まで知識があいまいなまま筋トレをしていたが、この授業のおかげで、色んな知識を身につけることができ、正しく筋トレできるようになった。(一から筋トレ)
- レッグ系の筋トレは重りを重くしたりできたけど、ベンチプレスをもっと重りを重くしてやってみたかったです。(一から筋トレ)
- 筋力トレーニングを本格的にやるのが初めてだったので、初めて知ることがいっぱい楽しかったです。初心者でしたが先生の御指導が分かりやすく助かりました。ありがとうございます。(一から筋トレ)
- 筋トレの大切さを知ることができました。(一から筋トレ)
- とても楽しい授業です。体も温まるし、いつも笑顔で取り組んでいます。(エアロビクス)
- エアロビクスが何をすることも分からない状態で最初授業を受けたが、最初の授業で説明を受けたり、毎回授業を受けていく中で、エアロビクスの楽しさや、基本的な動きを理解できるようになった。(エアロビクス)
- いつも先生の熱意を感じています。私もこれから一生懸命に頑張って先生のように上手になりたいです。どうも、ありがとうございます。(エアロビクス)
- 週に1回でも体をうごかすことでスッキリしてたのしい。最初は最後までできなかったふっきんができるようになった!! (エアロビクス)
- この授業をとって本当によかったと思います。毎回楽しかったです。本当にありがとうございます。(エアロビクス)
- 卓球は今までほとんどしたことがありませんでした。打ち方やラケットの持ち方を学べてよかったです。(卓球)
- 卓球がこんなに奥が深いと思わなかった。とてもおもしろいです。卓球選手にも興味を持つことができました。(卓球)
- 卓球の技術力が上達し、毎週すごく楽しかったです。これからはたまには卓球しようと思います。ありがとうございます。(卓球)
- 本当に楽しかったです。ありがとうございます。(卓球)
- 楽しかったです。ありがとうございます。(バスケットボール)
- ウォーミングアップの時間が長い。(バスケットボール)
- 凄く、楽しかったです。(ディスクゲーム)
- このような機会でないと、新たなスポーツにチャレンジできないのでここでディスクをできたことは貴重な経験だと思う。(ディスクゲーム)
- 満足しました。(ディスクゲーム)
- ありがとうございます。(ディスクゲーム)
- 楽しく学べてすばらしい授業であると思います。(バドミントン)
- 適度な運動ができてとてもリフレッシュできました。(バドミントン)
- 今までしたことないことをしてたのしかった。(動きづくり)
- 楽しかったです!! (動きづくり)
- 遅刻、すいません。有り難うございました。(バドミントン)

平成 28 年度 FD のスポーツ・健康分科会 FD 活動は、年度当初の計画に則り実施した。以下にその一部を示す。

スキーⅠ・Ⅱ 及びスノーボードⅠ・Ⅱ において、主に視界不良時における受講生の安全確保策の充実のため教員全員が視認性の高い蛍光橙色のヘルメットを着用して実習指導をおこなった。その効果測定について、受講学生や担当教員から調査を実施した。なお年度計画当初はアンケート調査を想定していたが、受講学生が少なかったため聞き取り調査に代えることとした。

受講学生より:

晴天時において視認性は良好であるとのコメントが多かった。一方で、霧やガスに覆われた視界不良時においては必ずしも視認性は高いとはいえない、とのコメントがあった。また視認するにあたり表面積を増やすなどして遠方からでももっと目立つ服装が必要、とのコメントがあった。

教員より:

視認性は高く、だいせんホワイトリゾート U2 リフトと N4 リフト(およそ 300～400m)との間で視認できしており、安全対策として有効であるとの意見があった。一方で、学生が滑走に夢中になるあまり、集合場所を通り過ぎてしまったケースが 1 回あった。遠方から視認する際に、ヘルメットの色だけではなく、ウェアの色も合わせて探しているとの意見が出された。2 月の中旬は各種学校団体などが実習を行うなど、時折ゲレンデは混雑する場面があり、教員を見失う可能性は少なからずあるとの意見が出された。

本年の実習では晴天、降雪、濃霧の条件下での実習であり、視認性について様々な条件で確認することができた。本年度はヘルメットのみでの実施であったが、学生や教員のコメントを鑑みるに次年度以降も安全確保策の拡充を行い、事故のない実習体制の構築が必要と思われた。

1.1. 日本語・日本事情分科

日本語・日本事情分科会長

林 翠芳（国際連携推進センター）

日本語・日本事情分科副会長（自己点検活動担当）

大塚 薫（国際連携推進センター）

日本語・日本事情分科副会長（FD活動担当）

佐野 由紀子（人文学部）

活動の概要

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅲ」、「日本事情Ⅴ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本語Ⅳ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」、「日本事情Ⅵ」が開講されている。

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケートを全科目の受講生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めた。

科目によって、受講者数のばらつきがあるが、受講生の比率については、正規生と交換留学生のバランスは改善されつつある。

1. カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文学部教員は日本事情科目を、国際連携推進センター教員は日本語科目を担当した。科目構成は、前年度同様、日本語科目Ⅰ～Ⅳ、日本事情科目Ⅰ～Ⅵを実施した。

また、2016年度の開講基本コマ数、担当体制については、メール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。

2. 自己点検活動

「第Ⅰ期・第Ⅱ期 教育力向上3カ年計画」に基づく「5・15週目アンケート」に関する自己点検評価活動を個人ベースで実施するとともに、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、FD活動と連動させた「授業ピアレビュー」を中心とする活動を行っている。

2016年度において、日本語・日本事情分科会では、日本語Ⅰと日本語Ⅲの授業内でピアレビュー活動を実施し授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全10科目を6名の教員で担当して行っている上、今回ピアレビューを実施した科目は二科目のみであったこともあり、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。

3. FD活動

「日本語」「日本事情」それぞれの科目ごとにFD活動を行った。「日本事情」では前年度のミーティング（本学での「日本事情」の位置づけ、受講生の属性、日本語レベル等の確認、授業内容を振り返り、問題点・課題の共有）を受け、その上でそれぞれの担当教員が授業内容を検討・決定した。